
君の隣【改訂版】

たなか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の隣【改訂版】

【Nコード】

N1086U

【作者名】

たなか

【あらすじ】

現実世界とデジタルワールドを救う戦いが終結して9年の月日が流れた。選ばれし子供たちの一人であった八神ヒカリは、高校2年生となり元の日常を過ごしている。しかし、あの戦いを境に彼女の中にある想いが生まれてしまった。それは現実世界では禁忌とされる許されざるもの。ヒカリは長年その想いを吐き出せず、苦悩の日々を送る。だが、それも限界が迫って……。。

この作品は『君の隣』の内容を改訂したものとなります。

デジモンアドベンチャーより、太一とヒカリの近親の恋愛を書い

ています。苦手な方や不快感を抱く方はご遠慮ください。またこの作品は原作通りではありません。・デジモンアドベンチャー02はこの作品では存在しなかったことになっています。キャラクターの性格が違ふことがあります。デジモンたちの登場は今のところ予定しておりませんそれでも読むぜ、という勇者様だけお読みください。

プロローグ（前書き）

心機一転よろしくお願ひします。
誤字脱字のご指摘大歓迎です。

プロローグ

今年もまた、夏の足音が聞こえてきた。蝉が鳴き声をあげ自己主張を始める。

今年は異常気象らしい。初夏にもかかわらず、気温は真夏のそれだ。今朝のニュースで濃い顔の気象予報士が「真夏並みの暑さになるでしょう」と言っていたが「本当に」と納得する。恐らく彼の暑苦しさを、スタジオの温度はさらに上がっているだろうけど。

ふと天を見上げる。雲ひとつない空は、原色では表せない自然な薄い青色が広がっており、その中心には太陽が我が物顔で闊歩している。

じりじりと地表を焼き、紫外線の雨を容赦なく降り注ぐその様は、まるで暑さに喘ぐ人々をあざ笑っているかのように思えた。

そういえば、あの日も暑かったな

初めてデジモンたちの世界に足を踏み入れた日のことを思い出す。私たちと不思議なモンスター達との冒険の日々。私たちは選ばれし子供たちの使命を帯びて、二つの世界を守るために強敵との戦いの臨んだ。それは普通なら音を上げてしまうような、過酷な試練の連続だったけれど、私の人生の中で最も充実していたように思える。

「平和だな」と、自分の脇を追い越していく小学生の少年たちを見てひとりごちた。

周囲を見渡す。

街は行きかう人々で溢れ、車の群れが道路を埋め尽くす。高層ビル群は、はるか上空から私たちを見下ろしていて、緑は驚くほど少ない。

こちらの世界での戦いで主戦場となったこの辺りも、戦いの爪痕は全くと言っていいほどきれいさっぱり消え、今ではすっかり忘れられているように思える。

あの戦いから9年。世界は大きく変わり、そこに暮らす人々もその変化に順応するために変わっていく。

しかし、あの夏に私の中で生まれた淡い想いの炎は、今も変わらずに私の内側で燃え続けていた。

1話

「またか」と思わずため息をついた。

玄関のドアを開けて最初に目に飛び込んできたのは、乱雑に脱ぎ捨てられた靴。今日日小学生でもここまで雑には脱がないと思う。

(今日はサークルが休みだったのかな)

自分より先に帰宅しているということは、そういうことだろう。

今頃、冷房を効かせた部屋でゴロゴロしている姿が目に見えかねた。

そっぽを向いた靴を揃えてから家へ上がる。直後、冷えた空気が肌に触れ、外の凶悪な気温で火照った体を冷ましてくれた。

私は靴を整頓しなかった犯人に呼びかける。

「お兄ちゃん。靴はちゃんと並べてついても言ってるでしょ」

彼からの返事はない。訝しみながらリビングに行くと、お腹を出したままソファに寝ころぶお兄ちゃんの姿を発見した。

そのだらしない恰好に苦笑を漏らす。起こしては可哀想だ。足音を立てないように慎重に自室に行き、荷物を置いて部屋着に着替えた。

「お兄ちゃん、よっぽど疲れてるんだな」

しかし、あんなに冷房の効いた部屋では身体が冷えてしまう。「そうだ」とタオルケットを持ってリビングに戻る。それを彼に掛けて、少し冷房の温度を下げた。これで大丈夫だろう。

熟睡しているお兄ちゃんの傍にゆっくりと腰を下ろし、顔にかかっている髪を払う。瞼がピクリと反応したが、すぐに元の隙だらけ

な寝顔に戻った。その様子がどこか年下の子供ようで可笑しく思う。お兄ちゃんは今大学2年生。立派な青年だ。小学生の頃は無鉄砲を絵に描いたような性格だったが、時が経つにつれ落ち着いてきた。今ではすっかり大人になった……はずだ。

あどけなさのなくなつたその顔つきは男らしく精悍で、特別整っているわけではないが、それなりにかっこいい。

起きているときは大きく力強い目。寝息をたてる薄い唇。細身だが無駄のない筋肉質な身体は、女の私とは違い固い。

身体が熱を帯びてくる。私の“異常な部分”が顔を覗かせてきた。私の黒く汚らわしい部分。

本当に気持ち悪い。

汗をかいているグラスコップを掴み、異常な頭と身体の熱を冷ますため一気に飲み干した。

(少し……疲れたな)

ソファに頭を預け、ゆっくりと瞼を閉じる。

眠りはほどなくして訪れた。

2話

目が覚めたときにはすでに日が落ちていた。

起きたばかりで頭がぼんやりしている。何か忘れているような気がするが……何だろうか。完全に覚醒していない脳では、思考が正常に働かない。思い出せなくて胸がモヤモヤする。

とりあえず身体を起こして伸びをした。身体の縮こまった筋肉が伸び気持ちいい。それから徐々に頭が冴えてきて、そのモヤモヤの正体がわかった。

（洗濯物だしっ放しだ！）

慌ててベランダに出て洗濯物を取り入れた。が、少し遅かったようだ。若干湿っていた。

洗濯物を部屋干しする。そのとき、何かが光っていることに気づいた。電気を消したままだったので部屋の中は暗く、すぐに光源を見つけることができた。

光っていたのは固定電話の留守番電話のランプ。点滅を繰り返すオレンジ色の光で目がチカチカした。

留守番電話を確認する。お母さんからだ。

（電話にも気づかないほど寝入っていたなんて）

苦笑しながら伝言を再生する。

『もしもし、今日もお母さん遅いから、適当に晩御飯食べておいてね。じゃあ』

今日も遅いのか。やっぱり大変なんだな

近頃お母さんはパートを始めた。最近の不景気でお父さんの収入だけでは心許ないからだ。そのためいつも帰りが遅く、家事は私がするようになっていた。

お兄ちゃんはまだ寝ているようなので、物音に注意しながら風呂場に行き湯を張る。

(さてと、あとは晩ご飯だな)

冷蔵庫の中を確認する。とりあえず豚肉と野菜がいくつかあったので、それで何か適当に作ることにした。

まな板を取り出し、洗った野菜を並べ包丁で切っていく。

両親の帰りが遅くなるようになり、こうして自分がキッチンに立つようになってからずいぶん経つ。そのため包丁さばきは上達し、今ではお母さんのようにリズムカルに切れるようになった。

(昔はよくお兄ちゃんが作ってくれたなあ)

お兄ちゃんはあるで意外に料理上手。彼が言うには、デジタルワールドでヤマトさんに教えてもらった、らしい。

幼いころは時々作ってくれる料理を楽しみにしていたものだ。

特にオムライスは好物で、思い出深い料理だ。

幼少の思い出を懐かしみながら、包丁を握る手を動かし続けた。

3話

それからしばらくして、料理ができたので、寝坊助な王子様を起こしに行った。

私が帰宅する前から寝ている彼は、未だに熟睡している。

やはり疲れているのだろう。そんな彼を起こすのは忍びないが、せつかく作った料理が冷めてしまっただけはもったいないので、迷った末起こすことにした。

身体を揺すり呼びかける。

「お兄ちゃん起きて」

「……ん？ ……ヒカリ？」

お兄ちゃんは寝起きの掠れた声で、私の名前を呼んだ。その声色つばさに、ドキツと心臓が跳ねる。

そんな私の動揺を知らぬまま、彼は私の頬に片手を添えそつと撫でた。その不意打ちに、寝る前に感じた感覚が蘇ってくる。

クーラーの冷風で身体は冷えているはずなのに、触れられている頬が熱い。

寝起きのためだとはわかってはいる。が、トロンとした眼差しで見つめられて、お腹の辺りが疼きだす。唐突な試練に頭を抱えたくなった。まずい状況だ。

理性に反して、抱きしめたい衝動に駆られる。

(……何考えてるんだろ)

本来の目的を忘れてはならない。そう理性が欲望にストップをかける。

今すべきことはお兄ちゃんをきちんと起こすことだ。そう自分に言い聞かせ、口を彼の耳元に寄せた。

「お兄ちゃん、寝ぼけてないで起きて！ 晩ご飯覚めちゃうよ！」
必要以上に大きな声を出す。鼓膜に大ダメージを受けた兄は、文字通り飛び起きた。

「つつ……。ヒカリい！ 耳元で大きな声出すなよ！」
耳を押さえている姿が情けなく、その姿に笑いながら「ご飯できたらから食べよ」とダイニングに向かう。

心臓は未だに激しく鼓動していたが、平静を装った。

お兄ちゃんは耳を押さえ、ぶつぶつ文句を言っているながら席に着いた。

「いただきます」

「うまそうだな。いただきます」

本当はお腹がすいていたので早く食べたかった。が、お兄ちゃんの反応が気になり、料理を口に運ぶのを目で追ってしまふ。

料理を口に含んだお兄ちゃんが、「ほんとにうまい」、と声を上げる。

そのストレートな言葉にホッと胸を撫で下ろした。

「お前、ホントに料理上手くなったなあ」

しみじみ言う彼に、照れ隠しで素っ気ない返事を返してしまふ。

「そんなことないよ」

可愛くない。自分でもそう思う。

でも仕方ない。私は彼の前では平常でいられないのだから。

4話

現在、後片付け中。

お兄ちゃんは「俺がするからいいよ」と言ってくれた。しかし疲れているのを知っていたので、なんとか先にお風呂に入ってもらうことに成功した。かなり渋ってはいたけれど。

優しいのはいい。だけど、自分のこともちゃんと労わってほしい。疲れてるときぐらい、私を頼ってくれればいいのだ。今までは私が頼ってはかりだったのだから。

洗い物を済ませると、ちょうどお父さんとお母さんが入れ替わるように帰ってきた。

「おかえりなさい。お仕事お疲れ様」と二人を迎える。

「ただいま。ヒカリ」

お父さんが靴を脱いであがってくる。が、お父さんの靴の脱ぎ方を見たお母さんは、私に掛けた声とは180度違う低い声で「あな、何度言ったらわかるのかしら?」、とお父さんに笑いかけた。

その瞬間体感温度が激しく下がった気がする。はっきり言って怖い。「すっ、すまん」

謝ると同時に慌てて靴を直すお父さんを見て、お兄ちゃんはお父さんに似ちゃったんだな、と一人で納得した。

(お母さん似で良かった)

お父さんには悪いが心底安堵した。

キッチンから料理を持ってきてテーブルに並べた。二人は席について料理をつつく。

「うーん、ヒカリはいいお嫁さんになるな。でもあんまり早くいかないでくれよ」

「あら、私はヒカリの花嫁姿が早くみたいわ」

料理を口に運びながら言う二人。毎度のことなので、「またそんなこと言つて」「と苦笑いで返す。

が、心の中は罪悪感でいっぱいだった。

それが実現する未来があるとは思えないからだ。

いたたまれず、自分の花嫁姿を期待する二人から目そらす。するとお風呂から上がった兄の姿が視界に入った。

「おかえり。遅かったな」と二人に微笑む。

久々に家族が全員集合したので、しばし家族団らんを楽しんだ。

その後私もお風呂に入り、寝支度を整える。

リビングに行くと、お父さんとお母さんがお酒を飲んでいた。

(明日に影響がないといいけど)

両親の明日の体調を心配していると、そこに兄の姿がないのに気づく。

リビングを見渡す。しかし、どこにも彼の姿はない。おそらく部屋に戻ったのだろう。

夫婦水入らずを邪魔しては悪いと思ったが、「おやすみなさい」と一声だけかけて私も部屋に戻った。

5話

部屋に入ろうとドアノブに手をかけたとき、隣の部屋のドアが開いた。

中から出てきたのは当然お兄ちゃんだ。彼は私を見つけると、「もう寝るのか」と尋ねてきた。

「うん、お兄ちゃんは」

「俺もそろそろ寝るよ、明日1コマ目からあるからな」

「そうなんだ。じゃあ早く寝ないとね。おやすみなさい」

そう言っただけで部屋に入ろうとしたが、「あ、ちよつと待ってる」という兄の言葉に遮られた。

彼は部屋に回れ右すると、手にタオルケットを持って戻ってきた。「これかけてくれたんだよな。ありがとな」と私に手渡す。

すっかり失念していたそれを受け取ると、頭にふと疑問が浮かんだ。

(なんでお兄ちゃんは自分の部屋に置いてたんだらう)

自分の都合の良いように解釈してしまいそうになったが、仲が良いとはいえ高校2年生の妹の部屋に勝手に入るといのは憚れたのだろう。気にしないことにした。

「どついたしまして。今度はお腹出して寝たらダメだよ」

からうように言っただけで、「いいだろ別に」とそっぽを向く。そんな彼をほほえましく思った。

もう少し話したかったが、お兄ちゃんがあれだけ寝ていたという

のに大あくびをしたので、今日はもうお開きにすることにした。

「じゃあお兄ちゃん、おやすみ」

彼はふわりと微笑み「おやすみ。ヒカリ」と言って私の頭をくしやくしやに撫でまわす。

これは兄の癖だ。いつも突然撫でてくる。そしてその度に私の理性がカタカタと音を立て始める。

身体が風呂上がりのように火照り、接触部分が敏感に感じられる。顔が熱を帯びてきた。

体中を駆け巡る欲望が、身体を、心を支配しようとする勢いを増す。

(これ以上はダメ)

「じゃあね」と逃げるように自室に飛び込んだ。

ドアを勢いよく閉める。と同時にベッドに身を投げた。手には先ほどのタオルケットがあり、ほのかにお兄ちゃんの匂いがする。

その匂いにまた“女のわたし”が刺激され、心臓が破裂するんじゃないか、というぐらいに激しく脈打つ。

(落ち着かないと……)

私は暴れる心をなだめるため、深呼吸を繰り返す。大きく吸って吐くを繰り返すと、少し落ち着きを取り戻した。

しかし依然心臓の鼓動は鳴りやまないうままだ。痛む左胸に手を持っていき、パジャマをぎゅっと強く握りしめる。

この胸にくすぶる想い。それは過去から現在までずっと消えることなく、時が流れていくほどにその炎を大きくしている。

わかっているのは、この“異常な想い”は決してこの世に形にしてはならない。してしまったら最後、私は大切なものをすべて失ってしまうのだから。

(余計なことは考えなくてももう寝よう)

目を閉じる。が、一向に眠りは訪れない。昼寝のせいか、それとも身体の熱のせいか……。

愛しい彼の匂いがするタオルケットを抱いたまま、眠れぬ夜は更けていった。

6話

4時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。これで休み時間に入るはずだ。しかし、この授業に関してはそうはいかない。そうこの世界史の授業に関しては。

黒板の前に立っている人物に目をやる。目に映るのは妙齡の女性
最上先生だ。

「わっ！ もうこんな時間！」
今まで熱弁を奮っていた彼女は、チャイムの音を聞いた途端に慌てだす。

また始まった、と教室の一人を除く全員が思ったことだろう。
彼女は世界史の知識が豊富で、その可愛らしい容貌と、人当たりの良い性格で生徒に人気がある。が、如何せん、授業中によく本筋からはずれた話をして大幅に時間を消費する。そしていつも最後に慌てて残った授業内容を板書して授業時間をオーバーしてしまうのだ。

今日も例に漏れず、急いで黒板に今日の進行予定分の内容を黒板に書く。それはまさに書き殴るといふ表現がふさわしく、黒板は乱雑な字の羅列に埋め尽くされた。

色を変えず白のチョークだけで書かれた文字は、板状に白と独特な緑色のコントラストを生み、凡人には理解できない一つの絵画のようだ。

書き終えた先生は「これで授業は終わりにします。いつも遅くな

つてごめんね」と謝罪して授業はお開きになった。

ほどなくして昼休みを迎え、教室が喧騒で満たされる。

授業のロスタイムのせいでノートをとるのが昼休みにかかってしまった。急いでお弁当を用意し、友達の待つ席に移動しようと立ち上がる。

直後、後ろから「ちょっと待って」と呼び止められた。動きを止め相手を確認する。確か隣のクラスの男子　　伊藤君、だったか。

「何か用？」

要件を聞く。彼は少し緊張しているようで、「今日、放課後ちょっといいかな」と頬を紅潮させながら私に問う。

その様子には私は1つの可能性を思い浮かべた。

(まさかね)

と否定できないところがつらい。こういうことは過去何度かあったから。

「いいけど今じゃダメなの？」

「……今はちよつとダメなんだ。放課後体育館裏に来て」

私の了承の返事を待たず、制止する間もなく彼は足早に教室から出て行った。外から大きな声で「どうだった？」「おー頑張れよ」、などと聞こえ、思わず顔をしかめる。

この時点で予想は的中しているのだろう。少しに憂鬱になりながら、今度こそ友達の待つ窓際の席に移動した。

席に着くと、友達がなにやらニヤニヤしながら私を見てくる。さっきの場面を見られていたようだ。

この後彼女らの冷やかしやら勝手な妄想やらに付き合わなければならぬことに、自然顔が引き攣った。

7話

「ヒカリってさあ、なんか男に冷めてるよね」

唐突に友人の一人が口にする。

さっきまで呼び出しの件に花を咲かせていた他の友人たちも、ウンウンと同意した。

(……なんでこうなるの)

頭を抱えたくなる。いいかげん私の話で盛り上がるのは止めてほしい。が、彼女たちの好奇心に満ちた顔を見るかぎり、それは望めない。今自分には敵しかいないようだ。

「そんなことないよ」

小さな抵抗を試みる。これで少しでも彼女たちの勢いが減退してくれば、と素っ気なく返した。

しかし、敵には全く効果がなかったようだ。

「そんなことある。だってヒカリモテるのに、みんな振っちゃうじやん。さっきの伊藤君だってかっこいいけど振っちゃうんでしょ？」

抵抗は無意味だと悟り、素直に応じることにした。

「まだ告白されたわけじゃないよ」

「うっん、絶対告白だね。まあとにかく、”もし”でいいから告られたら、どうするの?」

「断るよ」

途端に彼女たちは声をあげる。

「え〜!!! もったいない!!!」

「羨ましいなあ〜。もうホント代わってほしいよ」

思わず溜息をつきそうになったが、我慢だ。

「好きじゃないし、ほとんど話したこともないのに付き合ったりするのはちよつと」

「いいじゃん。そんなに深く考えないで、軽い気持ちで付きあっちゃえば」

「うーん。私はそういうのは無理かな」

「ヒカリって堅いね」

表面上は普通に話しているが、内心彼女たちに苛々してきた。

現実には高校生の恋愛なんてそんなものなのだろうけど、私の気持ちも知らないで軽く「付き合えば?」、などと言つのは止めてほしい。

少女マンガのような恋愛なんて、所詮物語りの中だけだ。今だつて「容姿がいい」、「ただ彼氏がほしい」、なんて理由で付き合う人が大半だ。

恋愛観なんて個人の問題で、他人が関与するものではないので否定する気はない。ただ私にとっては不特定多数の人に好かれても、本当に好きな人に好かれなければ意味がないのだ。

その意味では本当に代わってほしい。そうすれば、私だつてこの想いをぶつけられるのに。

暗い感情の海に溺れていたが、友人の一言で現実に引き戻された。

「じゃあさ。ヒカリって好きな人はいないの?」

「いるよ」

心の中で呟く。脳裏によぎるのは愛しい人の顔。

ただそう言ってしまうえば、彼女たちはその人物のことを根ほり葉ほり聞き出そうとするだろう。そうなるかと煩わしいので、「いないよ」と笑つて言う。

「だつたら付き合えばいいのに」

その言葉に、「余計なお世話だ」と脳内で突っ込みを入れた。

家に帰るともう7時をまわっていた。

今日も両親は遅いので、夕飯の支度をしなければならぬ、と玄関を抜ける。すると食欲をそそる匂いが鼻を刺激した。

（あれ？　なんで？　お母さん遅いはずなのに……）

不思議に思いながら匂いの発生源であるキッチンへ。そこにはいたのはお兄ちゃんだった。……なぜかエプロン姿の。

お兄ちゃんは驚いている私に気づくと「おお。ヒカリおかえり。遅かったな」と、声をかけた。

「あつ……うん。ちよつと友達と遊んでたの。遅くなってごめんね」「いいさ。気にすんな」

そう言って手に持っていたコップを口に付け、傾ける。中身はコップだろう。ガラスコップの中で炭酸が悲鳴を上げている。

「もうご飯できてるから、テーブルに運んでおいてくれ」

一気飲みした後、私に皿を手渡す。聞きたいことがあったが、とりあえず言われた通り料理を運んだ。

完了した旨を伝え、席に着く。

兄も席に着き、「いただきます」と、手を合わせた。

料理に手を付ける前に、疑問に思っていたことを尋ねる。

「これ、全部お兄ちゃんが作ったの？」

「おう。いつもお前にやらせてるから、たまにはな」

そんな風に考えてくれてたのか、と心が温かくなる。自分のことを思ってくれての行動は嬉しいものだ。

私の感動を知らないお兄ちゃんは「遠慮なく食べ」と言い、見てて気持ちがよくなるほど豪快に食べ始める。その姿にふふつと笑みをこぼした。こういうところは昔と変わっていない。

彼の言葉通り遠慮なく食べることにした。期待しながら口に運ぶ瞬間、私の身体に衝撃が走った。

想像よりはるかにおいしいのだ。これを本当に彼が作ったのか信じられず、思わず聞き直してしまう。

「これ、本当にお兄ちゃんが作ったの？」

お兄ちゃんは口いっぱい頬張っていたものを、すべて飲み込んでから答えた。

「そうだけ。どうだうまいだろ」

そう言ってカラカラと笑う。

本当に驚いた。お兄ちゃんは高校生になって以来全く料理をしなくなっていたからだ。

久しぶりに作ったという彼の料理は、私のものよりおいしくて、毎日料理をしてきた身としてはとても悔しい。

「……………うん。すごくおいしいよ」

平静を装いながら答える。

しかし、内心複雑な気持ちだ。最近料理の腕に自信が出てきたところだったのに、この敗北感。人の気も知れず、バクバクと食べる兄を見ながら対抗心を燃やす。

（絶対お兄ちゃんより上手になる！）

そう心に誓いを立て、今のところは彼の料理に舌鼓を打つことにした。

ホームルームも終わり放課後になった。

この後一方的な呼び出しの約束が控えている。重い気持ちを引きずりながら、約束を果たすために体育館裏に向かった。

友人たちの「頑張れ〜」という見当違いの応援を背にして。

「八神さんのこと、ずっと前から好きでした。俺と付き合ってください」

要件は予想通り交際の申し込みだった。意外だったのは、一見すると遊んでいそうな伊藤君の告白が直球だったことだ。人は見た目で判断するものではないな。

「ごめんなさい。私は伊藤君とは付き合えません」

「……理由聞いてもいいかな」

「その前に聞いていい」

「いいよ」

「なんで私のこと好きになったの？」

彼の顔に戸惑いの色が浮かぶ。二人の間に沈黙が訪れた。

黙ってしまった彼が話し始めるのを、私は待った。この質問をすると、相手が自分に対してどんな気持ちで告白してきたかわかるからだ。大抵は友人たちと同じ理由だけだ。

しばらくして彼は腹を決めたのか、ポツポツと話始めた。

「……最初は可愛いなって思うぐらいだったんだ。でも、いつもは友達と楽しそうにしているのに、……なんかうまく言えないけど、たまに悲しそうな顔してるって思ったんだ。その時からなんか気になっちゃって……気が付いたら好きになってたんだ」

驚いた。そんなこと言われるなんて全く思っていなかった。それは良い意味で私の予想を裏切り、素直に嬉しい。

……だけど、彼の気持ちを受け取ることはできない。

「伊藤君の気持ちは本当に嬉しいよ。今までそんな風に言ってくれ
る人いなかったから。でも、ごめんなさい」

伊藤君の顔が悲痛に歪む。

「……他に好きな人とかいるの？」

少し迷ったけど、誠意には誠意で返そうと思い、正直に言った。

「うん。他の人には絶対言わないでね」

噂好きの彼女たちに知られると後々面倒になるから。

「……そっ……か。うん。ありがとう」

そして、そこで私たちは別れた。見送った彼の背中からは哀愁が漂っていた。

告白を断るのはいつも罪悪感が伴うが、今回はいつにも増してそうだった。

でも、初めてだったな……。

「ありがとう……か」

それは私のセリフだよ。こんな私を好きになってくれて、本当にありがとう。

（彼が私なんかよりもっといい人に出会えますように）

ここに来るまでとは打って変わって、心は清々しい気持ちで満たされていた。

回想に耽った私をお兄ちゃんの一言が呼び戻した。

「ヒカリ。どうした、どこが悪いのか？」

心配する彼に慌てて「ううん。大丈夫。なんでもないよ」と取り繕う。

未だ疑わしげなお兄ちゃんの顔を見て「本当だから」、と念を押す。

「……そうか？ ならいいけど。お前は昔からいくら苦しくても我慢しちゃうからな。なんかあったら遠慮なく言えよ」

兄の慈愛に満ちた言葉に胸が熱くなる。彼は意識してしているわけではないのだろうが、私の理性をひどく揺さぶった。

再び料理を口に運ぶお兄ちゃんを見て、私の不安定になった心はどういうわけか完全に無意識な行動を起こしてしまう。

理性の網を通過していない、予想外の言葉が口からこぼれた。

「お兄ちゃん、私ね、今日告白されたんだ」

一瞬部屋が沈黙で包まれる。すぐに、しまった、と後悔したが、時すでに遅し。

軽く口から出たその言葉は、あまりにも重い雰囲気を生み出していました。

兄の方を恐る恐る確認すると、案の定彼は固まっていた。どうしていいかわからない、と顔に書いてある。

それは私も同じだった。この状況でどうすればいいかわからず、

瞬きすら忘れてしまう。傍から見たら相当おかしな光景だろうが、当事者である身としては笑い事ではない。

しかし、打開する妙案も浮かばず、私はただ俯くしかない。

彼は視線を下に落とし、一拍おいてから口を開いた。

「……そうか。で、付き合うのか？」

お兄ちゃんの返答に動揺する。

当然付き合うわけない。ただ彼の口からからそう聞かれるのが堪らなく辛かった。

(……まるで、他人事)

ネガティブな思考に支配されそうになる。そんな自分を慌てて叱咤した。何をしているんだ。今はこの状況を乗り切らないと。

ようやく冷静さを取り戻し、これ以上の失敗を犯さないよう集中する。

「うっん。付き合わないよ」

「……そうか」

無難な答えに安堵した。しかし、彼はどう受け取ったのだろうか。そう思うと不安は完全には拭えない。

再び沈黙に包まれる。お兄ちゃんはそれで以降、私に視線を移すことはなかった。一向に箸が進まない私とは対照的に、黙々と料理を平らげ、食器を片づけた。

スツと立ち上がりキッチンに向かうその背中を見送る。

数分前の自分をなじる。なぜあんなことを言ってしまったのか、と。

どんなに自分を責めても後悔の念は尽きることはなかった。

11話

私はお兄ちゃんに何を望んでいたのだろう。

嫉妬してほしかったのだろうか。告白してきた男子に憤慨してほしかったのだろうか。

しかし、どうしたって私が望む答えは返って来ない。私の気持ちが届くことは永遠にないのだから。お兄ちゃんにとっては私は妹でしかなくて、恋愛対象には入らない。それがこの世界での常識、つまりは正常。

なんてことはない。

結局、兄は正常に機能し、常人よりハイスペックな“優良品”で、私は“常識”という名のプログラムをダウンロードできず、異常なバグを抱えた“欠陥品”だということだ。

修正プログラムの存在しない欠陥を抱えた私は、正常な彼に恋い焦がれるあまり、いつかこの世界から不良品として処分されてしまおうだろう。

この世界は、失敗の烙印を押されたものに優しくはないのだから。

ベッドの上に転がり目を閉じる。さきほどの兄の戸惑った姿が浮かび、眠れない。

持て余した想いが、別のことを考えて逃れようとする私の理性を絡め捕り、いつものように思考の海に誘う。

私の想いつてなんなんだろうな

答えは疾うの昔に出ている。それでも何度も何度も繰り返して考え
てしまう。

結局、行き着くところはいつも同じなのだけれど。

私の気持ちの本質。それはどんなに綺麗に繕ったって、気持ちの悪い、生々しいグロテスクな恋愛。それは寄生虫のように私の穢い部分を糧に、日々成長していく。

そして、彼にも“それ”を求めてしまう私は、同じように気持ち悪くおぞましい生き物なのだ。

昨日のことでお兄ちゃんと顔を合わせるのが気まづかったので、目覚ましを30分早くセットしておいた。

いつもより早い目覚めが体が重くさせる。それでもお兄ちゃんと顔を合わせて気分を重くするよりマシだ、と自分に言い聞かせる。

彼は1コマ目に講義があるが、いつもぎりぎりに起きるので、30分早ければ朝は会うことはないだろう。少し寂しい気もしたが、気まづさがそれを上回った。

しかし、この世は歯車のようなものなのだろうか。自分が普段とは違う行動をとったため、別のところのイレギュラーを誘発してしまったのかもしれない。

予想を見事に裏切り、兄は私が靴を履いているときに起きてきた。玄関にいる私を視界に捉えると、大きな欠伸をしながら近づいてくる。

「……おはよう。今日はえらく早く行くんだなあ。なんかあんのか？」

「……うん。委員の仕事でちょっとすることがあって」

「お兄ちゃんを避けようとして」なんて言えるわけもなく、無難な嘘をつく。

「そうか。大変だな、頑張れよ」

お兄ちゃんが頭を撫でる。ホントこれ好きだな、と思いながらもこれだけでドキドキしてしまう私もよほどのものだ。

このまま流されるわけにはいかないので、「ストップ。髪がグチ

ヤグチャになっちゃうよ」と彼の手をそっとどける。

「悪い悪い」

「ん。許します。じゃあ行ってきます」

手を振って、家を出る。背中から「行ってらっしゃい」と聞こえた。

私の心配は杞憂だったようだ。

単純だけど、たったこれだけのことで私の不安は吹き飛んで、朝から少し幸せな気分になった。

「あら？八神さん早いのねえ」

早めの登校で第2のイレギュラーが発生したようだ。

普段は授業以外で聞くことのない声に呼び掛けられ、その方向に視線を向ける。そこにはジャージに身を包んだ最上先生がいた。

「おはようございます、園芸部ですか」

「ええ。今は雑草と格闘中ね。この時期からだんだん強くなるから大変だわ」

ふふっ、と彼女は笑った。

園芸部の顧問を務める彼女は、自他共に認める花好きで、花壇の増加を図ろうと校長先生に進言していると言われている。その噂は事実なのだろう。ジャージを子供のように土で汚している彼女は、小学生のように生き生きした顔をしている。

「八神さんは花は好き」

「はい、好きです。育てたりはないですけど」

「そうなんだあ、いいよね、花」とまた草取りに精を出し始めた。

その様子を眺めつつ、少し兄と似ていると感じる。

好きなことには全力で取り組み、楽しそうに笑うところや、少し熱中すぎて周りが見えなくなるところもそっくりだ。

私は先生の隣にしゃがみこむ。服に土がつかないように気を付けながら草を抜く手伝いをした。先生は「ありがとう」と言い、草取りにまた没頭する。

しばし無言で草取りを続けた。朝なのでまだ気温は高くないが、体が熱くなり、額が汗をかき始めた。気持ちが悪いので鞆からタオルを取り出して拭う。先生の方を見ると黙々と作業を続けていて、素直に「すごいな」、と感心した。

そんな私の視線を感じたからなのかはわからないが、「お花はね」と突然先生は話し始める。

「愛情をかけたらかけた分だけ、それに応えてくれるんだよね」

花を見て独りごとのように言う彼女の表情には、どこか憂いが混ざってるように思えた。

(普段明るい先生でも、こんな顔をするんだ)

そんなものとは無縁だと思っただけに、吃驚した。

戸惑っている私を余所に、先生はすくっと立ち上がると草を集めた袋を担いだ。

「ここまでにしよっか」

「……あつ！ はい」

一拍遅れて私も立ち上がる。が、戸惑いが消えておらず、ぎこちない動作になってしまった。

「八神さん手伝ってくれて本当にありがとうね。じゃあ授業頑張つて」

「はい。では失礼します」

私たちはそこで別れた。ゴミ捨て場は靴箱とは逆方向だったので背をむけて歩く。

ふとさっきの表情が気になり振り返る。彼女の背筋の伸びた背中が視界に映った。

その後ろ姿には、先ほど感じた憂いのは微塵も感じらず、普段通りの教師としての姿だった。

4時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。

今日は最上先生ではないので定時に終了。そのため急がずに昼食の準備をし席を移動する。そこには昨日と同じように、ニヤニヤと笑みを浮かべながら待ち構えている友人たちがいて、デジャヴだな、と心の中で溜息をついた。

「で、で、どうなったの？」

席につくなり、予想通りの質問が飛んできた。億劫だけど、彼女たちの質問攻めから逃れられそうもないので、適当に返答する。

「断ったよ」

「やっぱりか」と皆口をそろえて言う。

どこか嬉しそうなのは、彼氏がいらないこのグループ内から、彼氏持ちの誕生を危惧していたからだろうか。

(あながち間違いじゃないかも)

嬉しそうな彼女らの様子を見てそう思う。

この話題はここで終了かな、と思い安堵していた矢先、また突拍子もない質問が飛んできた。

「ねえ、ヒカリ。初恋とかどうなの？」

「えっ」

予想外の質問に動揺を隠せない。

「だって、ヒカリの初恋の人知りたくないじゃない。もしかしてまだとか」

どう答えようか迷ったが、冗談めかして「お兄ちゃん」と言った。事実だし。

「太一さんかあ…確かにカッコいいし、運動もできるし、何より優しいもんね」

「特にヒカリには」と強調する友人は納得と言った風に、うんうんと何度も頷く。

「惚れるのも無理ないね。でもいくら太一さんが素敵なんでもお兄さんだもんね」

「残念だね」、とあちらも冗談めかして返してくる。

「……そうだね」

友人の言葉で“現実”を改めて思い知らされる。

何度も自分では考えていたことだ。しかし、第三者から言われるのは相当堪えた。

今さらながらの後悔は、自分自身に大きな傷を与えてからだだった。これを最後に、ようやくほかの話題に移った彼女たちを見てホッとする。

しかし、友人の言葉が今もなおナイフのように私に突き刺さっている。

苦しさから逃れるための救いを求めて窓の外に視線を移す。視線の先には最上先生の育てた花が、風に揺れていた。

人も花のように愛情を返してくれるなら、私はこの恋心に苦しまずにいられるのだろうか

「何を考えているだろ」

不毛な考えをする自分に嫌気がした。

今日は日曜日。学校は休みだ。

最近精神的に疲れているので、昼まで冷房の効いた部屋で寝よう。と思い、絶賛実行中。

普段は省エネに協力的だが、少しぐらいならいいよね、と魔がさし、冷房の温度をいつもより少しを低めに設定した。

暑さから解放してくれる冷たい風を堪能しつつ、惰眠を貪る。不健康な気もするが、今日は気にしない。気にしないったら気にしない。

そんな風にしばらく自分を甘やかしていると、コンコンと少々力を入れすぎたノックの音がした。その音に目を覚ます。

(……お兄ちゃんか)

最近の疲れの原因に対し、睡眠を妨害された恨めしい気持ちを抱きつつ「どうぞ」と、入室を促す。

入ってくるなり彼がこちらを見る。

「悪い、寝てたのか」

目をこすり眠そうにしている私に謝った。

「いいよ。で、どうしたの？」

不機嫌な声だ。正直に言って私は寝起きが良いとは言えない。今日は特に快眠を邪魔されたのでそれが顕著に出ている。

お兄ちゃんはそのような私の態度を気にもせず、今思い出した、という風に言う。

「ああ、そうだ。昼飯外で食べないか？」

「……いいけど、お父さんとお母さんは？」

「二人は行かないってさ。お金はあげるから二人で行ってきなさい、だつて」

「ふふつ。似てない。30点だね、お兄ちゃん」

お母さんの口調をまねて言った彼にダメだしする。

恐らく不機嫌な私の機嫌を少しでも改善しようとしてのことなのだろうが、あまりにも似てない。が、それがむしろ面白かったので、機嫌を直すことにした。

ただ、兄に物まねの才能はないことは、しっかりと心に留めておいた。

「じゃあ着替えるから」と、部屋から追い出す。出ていくとき「ホントは似てるだろ」と言うので、「全然似てない」とあしらった。

お兄ちゃんと出かけるのは久しぶりだ。普通の兄妹ならば思春期になれば、お互いに避けるものだろう。しかし、私たちはそうでもなかった。

私は言わずもがな。お兄ちゃんは……まあ多少シスコ……妹想いなので彼が大学生になるまでよく一緒に出かけていた。

そのとき、店員さんに「可愛い彼女さんですね」と言われたことがある。私は恋人同士に見られて嬉しくなり、照れていた。

しかし、お兄ちゃんが困ったように、はにかみながら「妹なんです」と訂正すると、シユンとしてしまう。

傍からはカップルに見られたとしても、この関係はどうしようもない。

距離は誰よりも近いのに、私が望む関係からは誰よりも遠い。だからお兄ちゃんとの外出は楽しいのだけど、一方で悲しくもある。

「用意できたよ」

「おう、じゃあ行くか」

二人で玄関に行くと、お父さんから「いつてらっしゃい」と声をかけられた。

私たちは「行ってきます」と返し、ドアを出ようとする。が、「デート楽しんできてね」と、お母さんがいたずらっぽく言った言葉に、身体が硬直した。

お母さん余計だよ

心の中で悪態をつく。お母さんを無視して、苦笑しているお兄ちゃんと今度こそ家を後にした。

外に出ると猛烈な暑さが私たちを襲った。

その元凶は空に燦々と輝くあの球体　いわゆる太陽だ。地球から約1億5千万キロも離れているというのに、ここまで熱するとは、恐ろしい。

私は肌が焼けるのは嫌なので、日焼け止めクリームを丹念に塗り日傘でガードしている。お兄ちゃんはいえ、普段から屋外でサッカーをしているため慣れているのだろう。「今日も暑いなあ」と、言うだけだ。

日焼けで真っ黒になっている顔や腕。お風呂に入るとき痛そうだな。ふと今更ながら肝心なことを聞き忘れていることに気付く。

「そっか、え、何食べるの？」

「ん、何がいい？」

「……お兄ちゃんは何がいいの？」

「そっか、なあ、なんでもいいや」

やっぱりお兄ちゃんはお兄ちゃんだ。この無計画さは昔から変わっていない。

(仕方ないなあ)

呆れながらも思案する。熱いしあつさりものもいいかな。

ふと最近見たテレビ番組を思い出した。紹介されていたおいしいと評判のパスタ。一度食べに行ってみたいと思っていた。

「じゃあ、パスタは」

「いいぜ。そうしよう」

彼も賛成したので、紹介していた番組を携帯検索して、そのお店の位置を調べた。家から少し離れているため、電車に乗って移動した。

早めに来たつもりだったが目当ての店はすでに混んでいた。店の外にはカップルやら、おばさん集団やらが列をなしており、さすがはテレビで紹介されただけのことはある、と感心したが、これでは昼食がいつになるかわからない。

そんな中この炎天下の路上で待つのは、はつきり言って自殺行為だ。

お兄ちゃんの方をチラッと見る。彼も同じことを考えているのだろう。パタパタと服の中に風を送りながら、こちらを見て「別の店にしないか」と、言う。

「そうだね。これ、かなり時間かかりそうだし」

「決まりだな」

長い列から離れる。来た道を戻りながら、店を探すことにした。

太陽が後を追ってくるような感覚を覚える。

歩きながら店を探すが、どこを見てもチェーソンのファミレスやラーメン屋しかない。久しぶりの二人きりの外出でそれは嫌だったが、そろそろホントにお腹が減ってきたのと、太陽光を避けたい気持ちが入り込んできた。

「……なあ、もうハンバーガーで良くないか」

彼の提案に顎を引く。

「そうだね。お腹減ったしね」

結局、私たちは暑さと空腹に負けて、近くのファストフード店に入った。

昼時なのでこちらも混んでいたが先ほどの店ほどではなく、また店員の仕事がいいのかサクサク列は進んだ。

最前列までももの数分で着き、並んでいる間にメニューに目を通していたので、店員さんに注文を言う。

「ハンバーガー3個とポテトのLとコーラで」

「そんなに食べるの？」

「そうか？ 普通だろ？」

あっけらかんとしている彼に呆れてしまった。

「私はハンバーガーとポテトのSと紅茶Mで」

私の注文に今度はお兄ちゃんが反応する。

「お前こそそれだけでいいのか？ バーガーって腹持ち悪いだろ」

「十分だよ。お兄ちゃんこそ運動したわけじゃないのに、そんなに

食べたなら太るよ」

「いいんだよ。俺は太らない体質だから」

世の女性が聞いたら、鉄拳確実のセリフを吐いた。

確かにお兄ちゃんは昔から太らず、何度それを羨ましく思ったことか。私は陰ながら努力しているというのに、と軽く殺意が湧いた。バーガーを受け取り二人で席に移動する。

その間、視線を感じた。

またか、と心の中で溜息をつく。原因はわかっている。お兄ちゃんは見た目がいいので、結構女性陣の注目を集めるのだ。

まだ一人ならいい。が、もしそこにヤマトさんが加われればそれは恐ろしいことになる。一度あの恐怖を味わったので、「二度と女性の多いところに二人を置いてはダメだ」と、選ばれし子供たちの間では暗黙の了解になっていた。

席に着き、まだ視線が少し気になるが無視してハンバーガーに手を付けた。その様子をお兄ちゃんがジーっと見つめて微笑んでいたの、「どうしたの」と尋ねる。

「いやあ、ヒカリも大きくなったなあと思って」

「なにそれ。お父さんみたい」

「うえ〜。それはちよつと……いやかなあ……」

「お父さんが聞いたら泣くよ。最近お兄ちゃんが相手にしてくれないって嘆いてたし」

「うわあ…そんなこと言ってたのか」

そんな他愛のない話をしている内に、周りの視線は気にならなくなった。

家で会話するのは違って、外で話していると、なんだか恋人みたい、とありえないことを思ってしまう。

でも、今はその都合のいい幻想に浸りたかった。

「そついやあさ。二人で出かけるの、久しぶりだな」

「そうだね。お兄ちゃん大学に入ってから全然構ってくれなかったし」

ポテトを飲み込んだ後、そう言って意地悪を試してみる。予想通り、彼は必死に弁解を図る。

「いや、だつてさ。大学に慣れるのに必死だったし、サークルとか飲み会とか大変だったんだぜ」

「わかつてるよ。私怒ってるわけじゃないの。ただ、少し寂しかった……」

思わず本音がこぼれてしまった。こんなこと言つつもりはなかったのに。

「ヒカリ……ごめんな」

まただ。またお兄ちゃんにこんな顔をさせてしまった。

普通に考えたら、大学生の兄が高校生の妹なんか相手にするわけなくて、最近までの状況が当たり前なのだ。それなのに今日付き合ってくれたのは、最近の私の不安定さが彼の眼にとまったのだろう。優しい兄のことだ、そんな状態の妹を放っておけず、今日連れ出してくれたのだろう。

そんな彼の優しさに感謝しつつ、勝手な想いのせいで兄を煩わせている自分にまた嫌悪感を抱く。兄に与えてもらうしかできない妹。昔からそうだった。私は彼から多くのものをもらっているのに、私からは何も返せない。それどころか今にも破裂してしまっている。頭のを抱えている私は、兄に苦痛しかもたらせない。近い未来、頭の

おかしい私はきつとお兄ちゃんを地獄に叩き落としてしまっ。そしてその時に私たちの関係は破たんを迎える。

これは神様が与えてくれた兄孝行できる最後のチャンスなのかもしれないな

お兄ちゃんの心配そうな顔がぼんやりと視覚情報として脳に入ってくる。「こんな顔させたいわけじゃない」そう心で呟き、今日は彼に笑顔をプレゼントしようと思意する。

そう遠くない未来に苦痛与えてしまうことを考えると矛盾しているが、それでも今日ぐらいは兄孝行しようじゃないか。

「いいの。それより今日はいっぱい付き合ってもらっから覚悟してね」

「お手柔らかに頼む」

そう言っ笑う彼に、私も微笑みを返した。その笑顔の裏にお兄ちゃんに対する罪悪感を隠して。

ファストフード店を出ると、再び太陽との戦いに臨んだ。冷房の効いた涼しい店内から出ると、その光の威力が余計に感じられすくに回れ右したくなつた。すぐさま日傘を差して、紫外線を防御する。ヒカリが光から逃げるなんて、なんとも可笑しな気分だ。

隣のお兄ちゃんを見ると眩しそうに眼を細めて太陽を見上げている。暑さで立ち尽くしている隙だらけの彼に、いたずら心が湧いた。不意をついて手を取り「行こうよ」と引張って歩き出す。突然の行動に気が回らなかつたのか、体格のいい兄を、私の力でも引くことができた。

彼はすぐに手を離し、「恥ずかしいだろ」とぶつきらぼうに言った。

「お兄ちゃん照れてる〜」

「誰が……。たくつ。そんなことばっかしてるとおいて行っちゃうぞ」

そう言っ一人で歩いて行ってしまってお兄ちゃんを追いかける。本気でないのが丸わかりだ。思わず笑みがこぼれてしまう。

その証拠に私が追いつけるように足取りはゆっくりしたものだ。だから。

隣に私が来たのを確認し、自然にお兄ちゃんは身体を車道側に入れ替えた。

「こういうところが好きなんだよね

兄のさり気ない優しさに、私の心は暑さに負けじと温かくなる。そつと身体を寄せ、触れそつで触れない微妙な位置に身を置く。暑苦しいかなと思ったが何も言つてこないのもそのまま歩いた。

こうして歩いていると妙に意識してしまつて、周囲の景色がただの背景のように思えてくる。忙しなく流れていく車も、すれ違う人々も何もかもが弾き出されて、まるで世界に私たち二人だけしかない錯覚に陥る。

私がそんな心地よさに心を満たしていると、あまりに近寄つたせいか、日傘が彼の視界に侵入したようだ。

日傘に視線を移しおもむろに尋ねてくる。

「なあ日傘すると少しは涼しいのか？」

「そつでもないよ。ただの紫外線対策」

「ふ〜ん。ヒカりは肌白いもんな」

「お兄ちゃんは黒いね」

「ああ、サツカーしてるからな。風呂入るとき痛くてさ」

そつ言つて真つ黒に焼けた首を擦る。「やつぱり痛かつたのか」と少し可笑しかった。

それから時間をかけて店を回つた。私ばかりが楽しむわけにはいかないの、兄の興味があるスポーツ用品店や、本屋（主に漫画を見るため）に行つたりした。

購入はしなかつたものの、お店を回るのは楽しい。手に入らなくてもそれを眺めたり、自分が身に着けているところを想像したりするだけで楽しくなる。

目ぼしいところを粗方まわり終え、そろそろ帰ろうかという雰囲気の流れ始めたころ、フラワーショップと描かれた看板が視界に入った。なんとなく惹かれるものがあつたので兄に「入ろうよ」と言

い、店内に足を踏み入れる。店に一步足を踏み入れると、色とりどりの花が出迎えてくれた。花々は店内を華やかに彩り、花特有の芳しい香りが鼻を満たす。

花の中には知っているものもあったが、知らないものの方が圧倒的に多かった。私は見たこともない花に少し浮かれた。お兄ちゃんはそんな私の様子を微笑ましい、といった風に見守っている。

店内を見て回っていると、ある花の前でしゃがみこんでいる人物に目を奪われた。

20話(前書き)

ようやく追いつきました。

相手は私の視線に気づいたのか、こちらを向き驚いた様子で「あつ」と声を出した。

「最上先生こんにちは」

「こんにちはは八神さん。奇遇ね」

とりあえず挨拶を済ませると、先生はいつの間にか隣に立っていたお兄ちゃんに視線を移した。

「そちらの方は？」

「八神ヒカリの兄です。いつも妹がお世話になってます」

「ああそうだったんですね。こちらこそ、八神さんにはお世話になってます」

「先生はお花を見に来たんですか？」

「いえ、違うのよ。たまたま歩いていたらお花屋さんがあったから、ついね」

少し照れた風と言う彼女を、可愛い、と思った。

「ふふ、先生は本当にお花が好きなんですね」

「そうね。友達には時々病気がって言われるけど……ところでお二人は花を見に来たのかしら」

「私たちも偶々目についたんで、つい」

「あら、それじゃあ同じね」

そう言ってまた笑うので、私も笑いながら「そうですね」と返す。それから、雑談に興じているうちに花の話題になった。

「なにかおススメな花はありますか」

先生は考え込みながら、店内に咲き誇る花々に目をやる。そして一つの花に目を留める。

「これなんかは八神さんにピッタリな花ね」

視線の先にあったのは白い花だった。

「どうしてジャスミンが私にピッタリなんですか」

「ジャスミンの花言葉はね“愛らしさ”なの。ほら可愛い八神さんにピッタリじゃない」

先生その言葉に少し照れる。お世辞でも面と向かって言われると恥ずかしいものだ。

「そんなことないです」と否定すると、「あら、八神さんはごく可愛いわよ。ねえお兄さん」と唐突にお兄ちゃんに振った。彼はその不意打ちにたじろいで、視線を彷徨わせる。

先生余計なことを……。動揺の色を浮かべる兄に、申し訳ない思いがした。

「そ…そうですね」

「ほらね。お兄さんも同意したわよ」

こちらに視線を戻し、「ほらね」と笑った。

「言わせただけじゃないですか！」と突っ込みたくなったが相手が先生なので耐える。

正直、お兄ちゃんに嘘でも可愛いと言われたら困ってしまう。それだけで心拍数が高ね上がり、まるで溺れてしまったかのように肺に空気が回らなくなってしまう。

私の精神衛生上よろしくないのだ。

しかし、最上先生にそのことを言うわけにはいかないの、話題を変えることにした。

「せ…先生、ほかには何かおすすめの花はありますか」

「そうね…ハイビスカスはどうかしら？ “勇ましさ”って花言葉なのよ」

「お兄ちゃんにピッタリだ」

勇気の紋章をもつ彼に本当に合っている。色が赤いのも何かと熱

いお兄ちゃんにふさわしく思える。

「先生は何の花が好きなんですか？」

「……スイートピーかな」

「へえ、そうなんですか。スイートピー可愛いですよ。花言葉はなんなんですか？」

「……“優しい思い出”」

そう言った先生の顔に、いつかの時と同じ憂いの影が落ちた。

しかし、それは一瞬のこと。次の瞬間には元の明るい彼女に戻っていた。それが逆に不安だったが、私にはどうすることもできない。先生は立ち上がって「もう少し話していたいけど、遅いしそろそろ帰ろうか」と普段の明るい笑顔を張り付けて言った。

花屋の入口で先生に別れを告げた後、彼女の背中を見送る。

「なんかいい先生だな」

「うん、そうだよ」

「俺たちも帰るか」

「そうしょっか」

二人並んで帰り道を歩く。薄暗くなった空を見つめながら、今日という日を心に刻み込んだ。

20話(後書き)

花言葉は出典によって違っていきます。

21話（ここから『君の隣』の続きになります）

今日は朝から雨だ。最近の暑さに加えて、湿度が不快指数をさらに上昇させる。

肌着が汗でベタついて、気持ち悪い。シャワーを浴びて肌に纏わりつく不快な水分と汗を洗い流してサッパリしたい。

そう思うが時間がない。今朝久しぶりに寝坊したせいで、学校に遅刻しそうだ。

（昨日の読書が良くなかったな）

昨日は眠気が一向に訪れなかったので、友達に借りていた少女マンガを全話読破してしまったのだ。話はよくある兄妹の恋愛もの。兄妹だからとすれ違っていた二人。しかし実は本当の兄妹ではなく、二人は結ばれてハッピーエンド。

たいして面白くなく期待はずれだったので、読んだことを少し後悔した。

時計を確認する。思っていたより時間が経過していた。慌てて制服に袖を通し、洗面所に行く。鏡の前に立ち、あまり好きではないが今の女子高生には必須なので、嫌々ながら手早く化粧をする。

今日も世の女子高生が化粧にかける時間より大幅に少ない時間で完了した。

毎朝思つことだが、同世代の女の子たちは良くこんなことに時間をかけていられるものだ。正直言って面倒くさくて仕方がない。友人たちから毎朝何十分と時間をかけていると聞いたときは本当に驚

いたし、それが普通と知った時は啞然としたものだ。

急いで家を出ようとリビングを通り抜けようとした時、花瓶に刺さっている百合の花が目に入った。先日、お兄ちゃんと出かけたときに行った花屋で購入してきたものだ。その日は何も買わなかったのだが、後日一人で行って購入したのだ。

本当は最上先生が言っていた、ジャスミンやハイビスカスが良かったのだけど、手入れが疎かになりそうだったので店員さんと話した結果、花瓶に入れるだけの百合にすることにした。

この花を見ていると、あの日を思い出す。

二人きりでお出かけ。いつもより近く並んで歩いたこと。お兄ちゃんの手を握る。あの日を思い出す。

他の人から見れば些細なことかもしれないが、私にとってはそれらが大切な思い出だ。

心配していた理性の崩壊はあとどれくらいもつだろう。それまでの精神的な疲れと、気分の高揚で理性の檻は脆くなっていたが、あの日以来精神を立て直し、なんとか踏み止まれている。

が、依然気を許すことはできない。いつ不測の事態が起こらないとも限らないのだ。

思えば、私は何年もの間抱えているこの気持ちに真っ直ぐ向き合っていないかったのかもしれない。家族愛ではないことは確かだ。しかしそれは本当に“恋愛”なのか。彼のことを想って、触れたくて、ずっと傍にいてほしくて。それは果たして恋愛感情なのか。

あの外出の後、自分の気持ちを含め今までより深く追求してみた。たどり着いたのはいつもの場所。いやさらに極地的な結論に達してしまっただけだ。

私は溺れてしまっているのだ、この想いに。深海まで沈んでしま

っでいて、もう浮上は不可能。同じ醜い生物しかたどり着けない、異常者たちの行きつく場所。

苦しい。もがけばもがくほど酸素は失われ、罪悪感という名の水圧に押しつぶされそうになる。

もっと早くにちゃんと向き合っていればよかったのかもしれない。そうすればこんな深いところまで墮ちず、まだ浅瀬に留まっていただろう。

しかし、実際はそうならなかった。いや私はしようとしなかったのだ。この想いを捨てたくなかった。

これはエゴだ。私は理性の警報を無視して遠くへ泳いで溺れた。まさに自業自得。私はこの業を背負ってこれからも生きていくのだろう。

考えに耽ってしまい、いつの間にか進んでしまった時計の針を見て、どちらも手遅れだと悟った。

玄関を潜ると、冷房の効いた部屋で優雅にゲームをしている犯人を発見した。

例のごとく靴は散乱していて、これで前科何犯になるのだろうか。何度言っても改心する見込みのない彼に呆れてしまって、もはや注意する気すら起こらない。

靴を整えて「ただいま」と声をかけてから自室で部屋着に着替えた。雨で少し濡れてしまった制服をハンガーにかけ部屋に干す。

リビングに行き、ソファで前のめりになりながらゲームしているお兄ちゃんの隣に邪魔をしないように、そつと腰かけた。

テレビ画面にはサッカーの試合の様子が映し出されている。お兄ちゃんがよくしている世界的にも有名な某サッカーゲームだ。一度やり始めると何時間も夢中になって、なかなか止めない。

たまに誘われて一緒にやっているの、チームや選手の名前を覚えてしまった。

「またそのゲームしてるの？」

「いつものとは違う。今日発売の新作だけ。前から予約してたんだ」それで、「今日は講義がないから休みなんだ」と自慢していた彼が、こんな雨の日にも関わらず外出していたのか。サッカー好きなお兄ちゃんらしいな。

試合が終わったらしく、テレビからホイッスルの音が響いた。彼の使っていたチームが大勝したようで、画面には6 - 0と映し出さ

れている。

お兄ちゃんは盛大にガッツポーズを決め、まるで子供のようだ。時が流れて、身体は大人になったというのに、心は遊びたい盛りの少年のままなのかもしれない。

「一緒にやろうぜ」

「いいけど、手加減してね」

「1点ハンデやるよ」

「よし、負けないよ」

ゲームのコントローラーを手に持ち、それから1時間半ほどゲームに興じた。

1点のハンデはあったけど、彼は手加減なしだったので全戦全敗という結果になってしまった。

「ちよつと休憩」と言っ、お兄ちゃんはソファの背もたれに身を預けた。

「ふう……なんか喉乾いたなあ」

「お茶でいい？」

「おう、悪いな」

「いえいえ。愛しのお兄様のためですから」

冗談交じりの言葉を残してキッチンに向かう。

食器棚からガラスコップを2個取り出して、冷蔵庫からキンキンに冷えたペットボトルのお茶をそこに注ぐ。

中に入れていた氷が、カラツと音を立てた。

コップ両手に持って、リビングに戻る。ソファの後ろを通ったとき、前のめりになっているお兄ちゃんのうなじに目がいく。

(なんか妙に色気があるんだよね)

そんなことを思いながら兄の前にコップを差し出す。

「はい、お兄様」

「ありがとう。愛しの妹様」

「ふふ、何それ。なんか変じゃない？」

私の冗談にノッって返してきたようだが、どこかおかしな気がする。どう修正していいのかわからないが、おかしいのは確かだ。

お兄ちゃんはそのなお構いなしに、コップに口をつけ喉に流し込んでいく。

「さあゲーム再開だ！」

「えゝまだするの？」

「ヒカリさん8連敗中だけどいいのですかな？」

「もう！ そんなときだけ記憶力いいんだから！」

「ふふふ、いいんですよ。負けっぱなしのままでもいいならね」

「わかったハンデ3点ね！ これは決定事項です。さあやるっ」

「うええ！ 3点はデカすぎだろ！」

「ダメです。妹を馬鹿にした罰です。それとこれで負けた方が今日の晩御飯作るうか」

圧倒的優位で行われた試合の結果は、4 - 3のスコアで幕を閉じた。3点のハンデがあつたにもかかわらず追いつかれ、もうだめかと思つた。が、終了間際に奇跡のミドルシュートが決まる。

そしてそのまま試合終了。お兄ちゃんは啞然とした表情で画面を見つめていた。

「頑張つてねお兄ちゃん！ 晩御飯期待してるからね」

「つたく！ あんなのアリかよ……ゲーム会社に文句言つてやる」
結果に納得のいつていない彼は、このゲームを作つた会社に文句を垂れている。

「くつそお〜」

敗北感からか、お兄ちゃんは乱暴にソファに沈んだ。

私の手と彼の手が重なる。途端に心臓が悲鳴を上げ、顔に熱が集まり始めた。

赤くなつているのを気づかれたくなくて顔を下に向けてしまう。

急に俯いた私を見て彼は不審に思つたのか、「どうした？」と顔を覗き込んできた。距離が近い。

「う……ううん。別になんでもない」

焦燥から、たつたこれだけを返すのが精一杯。

「そうか？ ならいいけど……」

「そ、それより何作るの？」

「内緒。できてからのお楽しみ〜」

「いじわる〜」

離れていった手に安堵し、ホッと息をついた。

「まあ待つてな」

そう言ってお兄ちゃんがキッチンに消え、しばらくして持ってきた料理は

「オムライスだ……」

あの日のことを思い出す。

9年前の8月1日。私は人生を大きく変える出会いと別れを経験した。

あの日、お兄ちゃんはキャンプに出掛けたはずなのに、昼には家に帰ってきた。そのことを不思議に思ったけど、脇に抱えているピククの丸い生き物　コロモンを見た瞬間に、確信した。

お兄ちゃんはデジモンたちの世界に行っていたのだ

24話(前書き)

原作21話の内容が入ります。

いつだったか、私がこちらの世界にもデジモンがいると言ったことがあった。しかし、両親は信じてくれず、友人にもからかわれ、頼みの綱であったお兄ちゃんにも「見えないけど」と、とりあつてもらえなかった。

ニユースで映し出された大規模な山火事、交通事故、地震の現場。それらの事件に彼らはいつも存在していたというのに。

それから私はその話をしなくなったけど、デジモンたちは依然としてこちらの世界に現れ続けた。彼らは何もしないこともあれば、大規模な破壊活動をすることもあった。そしてしばらく経つと決まっただけで消えてしまうのだ。

幼い私は漠然とデジモンたちの世界に帰ったのだろうか、と考えていた。

そして、お兄ちゃんがデジモンたちの世界 デジタルワールドに行っていたという言葉を聞き、確信は現実のものとなった。

そして彼にもデジモンが見えるようになっていた。喜んだのも束の間、彼は街中にデジモンが現れたことを知ると、「お前はここにいる」と言っ、コロモンと一緒に行ってしまった。

なぜか不安になり、パジャマの上に一枚上着を羽織って二人を追いかける。

追いついた時には心底安心した。お兄ちゃんは「どうしてきたんだ！」と渋い顔をしたが、それは横断歩道の向こう側にいるオーガ

モンを見て、驚きと焦りのものに変わった。

彼は私を背中に庇うと、コロモンと一緒にオーガモンと闘った。戦闘の最中、コロモンはアグモンに進化して、見事に撃退しデジタルワールドに戻る。

私は目の前の脅威が去り、安心した。しかし、その直後アグモンの身体が宙に浮く。そして

「太一……ヒカリ……バイバイ」

そう言い残し、アグモンはあちらの世界に消えた。

「アグモン、待って俺も」

無意識だった。彼の腕を掴んで引き留めたのは。

もうお兄ちゃんが帰ってこないかもしれないという恐怖感と、独り取り残されるという孤独感。それらが脳から神経へ伝わり手の筋肉に命令したのだ。

ギュツと両手に力を込める。絶対離さないようにと。そつと額を彼の背中につける。仄かに香る彼の匂い、わずかに速くなる心臓の脈動する音、額から伝わる体温。風邪をひいていることなんかどこかに消えてしまっていて、五感全てで感じるこの愛おしい兄の存在を、ただただ自分の元に止めおきたかった。

お兄ちゃんはゆっくりと振り返り優しく微笑んだ。私に握られていない方の手に持つデジヴァイスが彼の身体を宙に運び、私から引き離そうとする。

行かないで！

そう叫びたかった。泣いて喚いて縋り付いてでも引き留めたかった。

だけとお兄ちゃんの優しい微笑みと、「風早く治せよ」という労りの言葉に、私は彼を見送ることしかできなかった。

空に消えていく兄の姿。完全に見えなくなったとき、絶望感と後悔の念が私を襲った。

その後、お兄ちゃんはまた夜に帰ってきたが、その時感じたのは安心感ではなくて、また置いて行かれるかもしれない恐怖感。

私はいつものように振る舞っていたが、心の中で決意を固めていた。

もう絶対この手を離さない

そして私が8人目の選ばれし子供だとわかったとき、この世界とデジタルワールドを救うためではなく、お兄ちゃんと離れたくないという理由でデジタルワールドに降り立ったのだ。

24話(後書き)

原作21話には悶絶しました。

「ごちそうさまでした」

手を合わせて、お兄ちゃんの方を見ながら言った。

「うまかったか？」

「うん。本当においしかった。……それに、少し懐かしかった」

「懐かしい？　なんでだ？」

本当に思い当たるものがないのか不思議そうにする。

「9年前のキャンプの日に、お兄ちゃん昼に一人だけ帰ってきたでしょ。そのとき私に作ってくれたんだよ。覚えてない？」

「……なんか、そう言われれば作ったような気がする。でもそんなことよく覚えてたな」

「私にとって大事な日だったから」

あの日からすべては始まったのだ。仮面を被ったこの生活を長い間続けてきたが、この悲劇にも幕を下ろす時は近い。

(いや……喜劇なのかもしれない)

ピエロのように“恋愛”という名の喜劇に躍らされ続けて、最後には踊り狂って幕引きを迎える。

お兄ちゃんが幸せになることを願っているのに、その隣に自分がないのが許せない。そんなドロドロしたヘドロのように腐って、腐臭をただ酔わせているこの“恋愛”という名の想いを捨てることが

できないまま、蓋をしてみても見ぬふりをしている間にさらにその臭いを強めてしまって、もう鼻を塞いでも誤魔化しがきかないところまでできてしまっている。

あとどれほどの猶予が残されているのかはわからないけど、すべての終わりが訪れるその時まで、……それまではあなたの隣にいることを許してほしいんだ。

夜も更けて、子供たちは眠っている時間になった。外では雨脚が強まっているのか、屋根や地面に水が叩き付けられる音が大きくなる。

問題を解く手を止め、ベッド側の窓に近寄り外を伺う。明かりでわずかに見える程度だったが、確実に先ほどより勢いよく振っている。

「今日はいつもよりも遅くなる」と言っていた両親が心配になった。二人が職場を出るときには弱まってくれればいいけど、この調子だとそれも無理かもしれない。

少し不安を感じながら、勉強机に戻る。しかし一度集中が切れてしまい、気がつけば3時間近く机に向かっていたので休憩することにした。

キッチンに行き、お茶でも飲もう。大きく伸びをして部屋を出た。

キッチンに行った時、風呂上がりのお兄ちゃんを発見。またコーラを飲んでいる。

「おっ？ お前もなんか飲むか？」

「う……うん。じゃあお茶で」

「ほら。それにしてもお前お茶好きだよな」

「お兄ちゃんこそ、サッカー選手のくせにコーラばかり飲んでる

じゃない」

「コーラは俺のガソリンなんだよ」

彼の冗談に笑う。が、それは動揺を押し隠すためだ。彼の色気にあてられそうだから。

風呂上りというのはなぜか色っぽい。頬に赤みがかかっているし、しっとり濡れていてなにか刺激するものがある。

そんな狂った感情を誤魔化そうと、お茶を口に含む。が、味がしない。

味覚が働いていない？

……いや、全感覚を動員してお兄ちゃんを感じようとしているのだ。私の理性を無視して。

意識がお兄ちゃんにもっていかれていて、身体が動きを止める。

その間、彼はコーラを一気飲みすると、ぶはあ、と息を吐いた。

彼の双眸が私を捉える。

「そっぴゃあ最近元気なかつたけど、今は大丈夫そっぴゃあ。安心したよ」

意識が彼の言葉ではなく声に向けられていたため一瞬反応が遅れる。

脳が慌ててその言葉の意味を理解し、返答を命じた。

「心配かけて、ごめんなさい」

「謝らなくていいさ。なんかあったら俺に言え。俺にできることはするから」

なっ、と思いやりに満ちた声で言う。

「ありがとう。でも大丈夫だから」

言えるわけない。

あなたにしかできないことはある。でも、それは同時にあなたにできないこともある。

私のこと女として見てほしい。

女として好きになっただけ。

女として　　愛してほしい。

そんな願いを、どうしてあなたが伝えることができようか。

私の心はあなたの一挙手一投足にいちいち反応してしまって、それが優しさに溢れているほど、私の決意は揺らいでしまう。これ以上かき乱されるとそれこそ、絶望への一步を踏み出してしまふ。

（まだ……まだダメだ。できるだけ長く、少しでも長く、お兄ちゃんに隣にいたい）

“兄思いの妹”の仮面をはめ、“彼を想う女”としての顔を覆い隠す。その仮面の表情は兄と会話を楽しんでいるように見えるようにできている。

仮面の下は涙は決して見えないように。女の私を見せないように。

いま私は笑えているはずだ。そのはずなんだ。でも……だったらこの頬を伝うほのかに温かいものはなに？

「ヒカリ……どうして泣いてるんだ？」

「えっ？ あ……れ……わたし」

嘘だ。私は今笑っているはず。泣いてなんか……。

手を頬に当てる。瞬間生ぬるいものを感じて悟った。これは涙だ。

私は見誤っていた。大丈夫だと考えていた私の精神は限界だったのだ。おそらくずっと前から。それを見て見ぬふりをしてきたせいで、もはや成すすべもなく身体が心の感じるままに反応してしまつた。

その結果がこれだ。

「どうした？ 具合が悪いのか？」

兄の焦った声が部屋に響く。

「……違うの。大丈夫……だから……」
「ヒカリ……」

精神が限界を迎えても、なけなしの理性が私を繋ぎ止めた。悪あがきとして俯き手で顔を覆う。

彼には私の“女”の表情を見られなくなかった。

しかし、意識すればするほど女として彼を想う気持ちが熱を帯びていく。

身体中を駆け巡る想いが、私を中から焼き尽くしていくかのよう
に　　熱い。

思考はもうボロボロだ。何も考えることができずに、ただ顔を隠したまま立ち尽くしてしまう。

そんな情けない私の頭に、ふと温かいものがのる。そして子供をあやすような優しい動きでゆっくりと撫でまわした。

(……お兄ちゃんは、ずるいよ)

どんなに私の心が壊れてしまっても、たったこれだけのことで解決してしまう。

髪を絡めるその指が、頭を覆う掌が、そしてその緩慢な動きが優しく、愛おしい。

自分はどれだけ彼に依存しているのか。

八神太一という存在は、もう私の中では生と同義なのだ。彼がいなければ、私の世界は絶望という闇に沈んでしまう。

私はされるがまま、おとなしく彼の優しさに身を預けていた。

先ほどまでの鬱蒼とした気持ちが、言葉では表せられない温かい気持ちに変わっていく。そのためか、だんだんと顔が綻んでいくの

がわかる。自然に顔が上がった。

それを見たお兄ちゃんが「……ヒカリはかわいいな」、と私を溶かす、とびきりの微笑みを浮かべる。

その顔は反則だ。

身体が、心が、自分の意識の下から離れるのを感じた。私のドロドロの塊を覆っていた理性という名の檻は、ここ何日かで想像以上に脆弱になっていたようだ。

このときすでに、私の気持ち悪い衝動を抑えつけるものは消え、ただなすがまま、流れに身を任せるように私は彼の首に手を回す。

無意識に

お兄ちゃんの唇に自分のそれを重ねた。

それは短く軽いキスだった。

時間にしてみれば、ほんの一瞬。だけど、私にはまるで時間が止まってしまったかのように感じられた。

お兄ちゃんの唇の感触が、自分のそれに残っている。コーラで湿っていた彼の唇が冷房で乾燥しきっていた私の唇を潤し、コーラの糖分が残っていたのかはわからないけど、ほんの少し甘かった。

余韻で頭が痺れる。襲ってくる快感の波。それを言葉で語りつくすことは私の貧相な語彙力では到底できない。

脳の指令がなくなってしまうた身体は、骨格を失ったかのように崩れ落ちそうになり、お兄ちゃんにもっと身体を密着させることになんとか耐えた。

顔を彼の胸板に押し付ける。お風呂上がりなので彼が愛用しているボディソープの匂いが鼻をくすぐった。

耳には彼の心臓の音が響く。彼と私の心臓の鼓動。二つが混ざり合い、この瞬間に生まれては消えゆく音色を奏でる。

次第に瞳が、頬が熱を帯び、身体の奥が疼く。このまま彼の身体にずっと身を預けてしまいたいという衝動に駆られ、またも無意識に体が動きそうになる。が……。

「……ヒカリ」

抑揚のない声。その声が私の理性を揺り起し、身体を停止させた。刹那、静寂が部屋を満たす。

次第に、外で何かが絶え間なく打ち付けられる音が鼓膜を突く。雨の音だ。

それは時間の経過につれ大きくなり、それに比例するかのようになり、胸の中の後悔の水たまりが、広く、深くなっていく。

身体が急激に冷え、嫌な汗が頬を伝った。自分のしてしまったことの重大さによろやく気付いたが、もうどうしようもない。

自分はもつと理性的だと思っていた。たとえ終わりの時が訪れようとも、この想いを言葉にする以外の行為で表そうなんて考えていなかった。しかし現実はそのようではなかった。

結局、私は自身の中に潜む獣を飼い馴らすことができず、後悔ばかりだった。表面的に飼い主である私の言うこと聞くように見せかけていただけだったのだ。

いや、最初は聞いていたのかもしれない。しかし、時間が経ちそれは空腹の限界を迎えた。

この9年間という長い間、「待て」の状態でい続けた想いは、目の前にいる存在を見ていることだけしかできなかった。恐ろしい苦行だ。これではいつか壊れてしまう。そして今日、飼い主の命令は効力を失うこととなった。

それが今のこの状況。絶望しかない未来。これから起きる事態に、足が震え、眩暈がしそうになる。

彼の手が私の身体を引き離し、困惑の眼で私を捉える。

「……お前……今のつて……」

お兄ちゃんの声が雨の音を割った。

「ふざけたただけだよ」

咄嗟の言葉は、自分でも驚くほど自然に発せられた。

「……ふざけただけって……」

「お兄ちゃんがどんな反応するか試してみただけ。それに兄妹だから別にたいしたことじゃないよ」

言い訳を並べ立てる。自分が滅茶苦茶なことを言っていることは気づいている。

自己保身のための言葉の羅列が喉を通り抜けるたびに、自分という存在がさらに醜いものになっていくことにも。

だけど、それでも止めることができない。

そんな私の言い訳に、彼の表情はどんどん歪んでいき、そして

「ふざけるな！ そんなことで納得できるわけないだろ！」

突然の怒声に身体が委縮する。今まで自分に向けられたことのない烈火のごとき怒り。それは私の自己中心的な心をいともたやすく黙らせた。

彼の困惑の瞳は、今では憤怒で満たされていて、その視線が

(もう逃げられない)

そう思わせるに十分な威力を持ったの弾丸として、私の一番醜い部分を貫いた。

27話(後書き)

書いちゃったよ。

288 話(前書を)

にじまよじにまよじにまよじ。

「……………ごめ……………ん……………なさい」

震える声で発した途切れ途切れの謝罪は、雨の音に負けそうなほど小さかった。本当は顔をあげて、ちゃんと謝らないといけないんだろうけど、それは無理。

いまの私は情けないほど震えていて、お兄ちゃんの顔を直視なんてしたら、あの怒りの眼に心臓が止まってしまいそうだから。

そんな私の恐怖がお兄ちゃんにも伝わったのか。お兄ちゃんは大きく息を吐き、ガシガシと頭をかく音が聞こえる。

「……………なんでこんなことしたんだ」

先ほどよりも若干勢いを抑えた声で、私の返答を促した。

しばしの沈黙が私たちの間を駆ける。俯いた私の頭部に、逃さまいと突き刺さるように感じる彼の視線。

お兄ちゃんは何っている。私の口から先ほどのアブノーマルな行為の理由を告げられるのを。

それでも、まだ逃げ道を探ろうとしている自分がいる。どこまで卑怯な人間だというのが。自分がとんでもなく矮小に思え、そう思ったとき答えは出た。

悪あがきもここまで……………か

私は逃げることを諦め、自分の気持ちに終止符を打つことを選んだ。

依然として足が竦んでいる。喉がカラカラに乾き、汗がジワジワと体中を湿らせていく。気を抜いてしまえば、一気に思考が逃げの道走ってしまったようだ。

(それじゃだめ。終わらせるんだ……)

涙がこぼれそうになるが、「ここで泣くのは卑怯だ」と、自分を叱咤する。

俯けていた顔を上げ、まっすぐ彼の瞳を見つめる。怒り、困惑、不安、その他の感情。それらが入り乱れたようなその瞳は、私の7年の人生で初めて見るものだった。

私は震える脚に力を入れ、スカートを皺ができるほど強く握りしめる。自分の荒くなった呼吸が明瞭に聞こえ、それが焦りを生み、また息が荒くなった。

なんとか気持ちを落ち着け、私は人生で最高に最低な言葉を紡ぐ。

「……私は……あなたが好き」

「……えっ？」

あまりに小さく呟いたため、聞き取れなかったようだ。理性が最後の悪あがきにでたのだろう。この先にある未来が、私の心を粉々にしてしまうことを拒否するために。

息を大きく吸い、肺を酸素で満たす。今度こそはっきり言うんだ。

「好きなの、お兄ちゃんが」

時が止まる。彼は私の言葉を処理できないのか、フリーズしてしまった。

私はお兄ちゃんの次の言葉を待った。どんな言葉が来るのかは予想できる。兄の行動は良くも悪くも単純なのだから。

「……好きって、……兄妹として、ってことだよな？」

ほら。やっぱりだ。

「違う！」

兄の言葉を強い口調で遮る。

「違うよ、私は唯の兄妹愛なんかじゃなくて、あなたを一人の男としてみてるの」

私の気持ちを否定しないで。無かったものにしないで。お願いだから。

身体の奥から湧き上がる感情が抑えきれず、思わず肺が声帯が干切れるほど叫びたかった。私の汚い利己的な願望を。

しかし、彼は食い下がる。

「……勘違いじゃないのか？俺たちずっと一緒にいたから、それで家族愛をはき違えてんだって……」

……わかってた。わかってたよ、私の気持ちは受け入れられないものだって。

だけど、心のどこかで少しだけ、本当に寡少な甘い期待があつて、それがいま完全に消失してしまった。

残ったのは、諦めの気持ちと絶望だけ。

それでも、私が本気でお兄ちゃんのことを想っているということだけは理解してほしい。

「うづん、この気持ちは本物だよ。そうじゃないと、お兄ちゃんに触りたいとか、キスしたいとか、……抱いてほしいとか思わないでしょ」

私の直接的な言葉にお兄ちゃんは再び固まってしまう。

絶句とはこういうことを言うのだろう。目を大きく見開き、口を開けたまま次の言葉を発することができない彼に、続けた。

「でも、お兄ちゃんにとっては気持ち悪いだけだね。……ごめんね。こんな気持ち悪い妹で」

「……気持ち悪いだなんて、そんな」

ああ、なんであなたはそんなにも優しいのか。目が泳いでいるのは本当にヒいてしまったからだろう。にもかかわらず、こんな頭のおかしい、気持ち悪い生物に心を碎くなんて馬鹿だ。

気持ち悪いと思っているならそう言えばいい。それをしないのは「普通言えないだろう」なんていう暗黙の了解みたいな、安っぽい偽善なんかではなく、優しくて残酷な彼の良心から。

本当に嫌になる。どうして私たちはこんなにも対照的なのか。片や光に満ちた、正常で優良な兄。片や闇に魅入られ、異常で穢らわしい妹。彼の方がよっぽど光に溢れていて、私の名前が皮肉に感じられる。

「いいの、自分でもわかってるから、普通は兄を好きになつたりしないもんね。わかってた。ずっと前から、私は異常なんだって。だ

から……もう、私に近づかないでほしい……」

私がそう言い切ると、彼は悲痛な面持ちになった。

あなたは優しくすぎるよ。真っ直ぐで、きれいで、浅はかで、こんな私にまだ優しくしてくれるほど、とんでもない馬鹿だ。

「……お兄ちゃんは優しいから、同情とか罪悪感で無理に今まで通り接しようとしてくれるかもしれないけど、それが私には苦しいの。苦しくて苦しくて仕方がないの」

お兄ちゃんは私の告白を黙って聞いている。

「あのキャンプの日から、ずっとお兄ちゃんのこと想ってきた。でも、それは“おかしいこと”だから何度も諦めようと思った。……でもダメだった。……だから……お願い……」

思わず自嘲的な笑いがこぼれる。私は卑怯で最低だ。ここにきても彼に責任を負わせようとしている。自らの手で終わらせることができない自分が情けない。

こんな気持ちの悪い私の、穢れた罪深い心が二度と修復することができないように、決定的な幕引きの言葉を言い渡してほしい。

そんな負の期待を抱き、途中からずっと黙ってしまったお兄ちゃんの反応を待つ。

そして彼が次に発した言葉は。

「……明日改めて話そう」

「なんで！」思わずそう叫んでしまいそうだった。

彼が言い渡したのは引導ではなく延命を意味するひどく残酷な言葉。それは当然私の望んでいたものではなく、予想もしていなかったものだ。

延長されてしまった断罪の瞬間。これでは断頭台に頭を置き、ギロチンの刃が唸り声をあげながら血の飛沫を巻き上げるのを待つ本

当の罪人のようだ。いつそ早く首を落としてほしい。

さつきまでの決意が、恐怖と絶望にジワジワと侵されていき、視界が闇に覆われてしまったかのように暗くなる。閉じた瞼の裏で、描いていた別れの光景が消え去ってしまい、私は本当にどうすればいいかわからなくなってしまった。

「……………じゃあ」

お兄ちゃんはそう言い残し部屋を後にする。離れていく彼の背中があの日のもとの重なり、思わず手を伸ばしかけたが、手は前に進まなかった。

ドアが閉まる無機質な音。その音を合図に、足が身体を支える力を失い、膝をついてしまう。

明日告げられる審判を待つことはない。出来レースなのだから。具体的な決別は告げられなかったが、実質私たちの関係は、今日をもって恋愛はもちろんのこと兄妹としても終わりを迎えたのだ。

9年間。それは想いを抑えつけるにはあまりに長い時間だった。その間に育った想いの塊は、ばらばらに砕けちり、無数の小さなかけらとなった。

修復不可能なほど粉々なそれらは、いま私の双眸から流れ落ち、小さく音を立てながら床に苦しみの跡を残した。

28話（後書き）

どうしてこんなにヒカリが鬱になっちゃったんだろう……。
気分を害された方すみません。

29話(前書き)

決戦の前にワンクッション。

ああ、雨だ。

そう気づいたのは服がびしょ濡れになった後だった。いつの間にか辺り一面水浸しになっていて、それに気づかないほど長い間、意識をとばしていたことがわかった。

世界が回るのはこんなにも速かっただろうか。

いつの間にか時は過ぎ、昨日の夜から私の視点は帰宅途中の道に切り替わっていた。脳がストライキを起こしたのだろうか、昨夜の“あの出来事”からの記憶がない。というより、今日の今まで私が何をしてきたのかはわかっている。が、それは身体が普段の行動を無意識に行っていたので、映像としては残っていても実感がなく、というのが一番近い気がする。

顔に打ち付ける雨が鬱陶しい。傘は持っていたが、それを使って身体を守る気にはならず、雨に降られるがまま制服は水を吸いこんで体重を増やし、重りとなって負荷をかける。

こんな私の様子は、すれ違う人の目にはおそらくひどく不気味に映るだろう。

(というか、そんなことはどうでもよくて)

考えるべきは、この後に控えている自分の判決だ。裁判長兼被害

者の兄は、被告人である私を如何に裁くのか。

昨日の様子を見る限りでは、彼の倫理観という法は確実に私の救済にはならない。気分はさながら死刑判決を待つ犯罪者といったところだ。

恐怖はない。あるのはこの先に待ち受ける残酷な未来という名の地獄への絶望感。いまままで築き上げてきた私たちの関係が　昨夜の時点で事実上崩れてしまっているが　彼の判決で崩壊する。それが終わったら、私は愛する人に触れることは愚か、目を合わせすることも叶わないだろう。

それほどこの想いは罪深いのだから。

大通りを抜ける。ここを抜ければ家はもう目の前。ゆっくり進んだとしても玄関まで辿り着くの5分もかからない距離だ。

頭がそう認識した途端に、足が鈍くなった。雨のせいで太った制服のせいなのか、脳が心の動きを感じ取って筋肉を鈍らせているのか。考えるまでもなく後者だけだ。

彼はもう帰っているだろうか。大学生の彼の帰宅は不規則なのでわからないが、昨日の部屋を出る前に言った言葉を考えると、そう遅くはならないだろう。

玄関に靴が散乱していないことを祈り、地獄の入り口となるであろう自宅のドアに続く道を、まるでカメのようにのそのそと歩む。無駄なことを。そう思わないでもないが、できるだけ引き延ばしたいという感情を、咎めようとは思わなかった。

しかし、そんな抵抗もむなしく、この2本の脚は玄関まで私を運んでしまう。

ノブに手を伸ばして掴んだ後、しばし無言で玄関のドアの前に立ち尽くす。

(このドアを開けたら……)

そう思うと手が動かない。

しかし、私には逃げ場などない。たとえこの先に待っているのが絶望しかないとしても、私は進まなければならぬ。

意を決し、額に張り付いた水の滴る髪を払った後、恐る恐る玄関のドアを開ける。

結果として、祈りは通じた。が、それは“散乱してはいない”という点だけで、彼の靴は今日に限ってきれいに整頓されていた。

それがいつもと違う雰囲気を醸し出していて、それが私の中に恐怖を生みだしてしまった。

とりあえず玄関に朝お母さんが準備してくれたであろうタオルで、びしょ濡れの頭を拭いた。が、余りにも濡れすぎていたため、タオルが飽和してしまい、役に立たなくなってしまった。

仕方がない。濡れたままの身体を引きずり、洗面所に行き制服を脱ぎ下着も一緒に洗濯機に入れておいた。タオルを手に取り身体を拭こうと思ったが、やっぱりシャワーを浴びようとそのまま置いてお風呂場に入りシャワーの栓を回す。

温かいお湯が冷えた身体を暖めてくれる。しかし、冷え切ってしまった心の解凍は不可能なようだ。

長時間温かい雨を浴び、身体はもう十分温まったはずなのにシャワーを止めようと、身体は動かない。浴室には規則的な水の流れる音だけが響き渡り、換気線を付け忘れていたため、行場をなくした真っ白な湯気が私の身体を包む。

(このまま時間が過ぎてしまえば……)

そんな無意味な考えが思い浮かぶ。いつまでも逃げ続けられようにかなるというのだろうか。諦めて浴室から出ると、服を着て洗面所を後にした。

リビングに行くと、テーブルの上に白い紙が置かれている。興味もなかったが一応確認しようと、紙に載った文字を見たとき、息が止まった。

『帰ったら俺の部屋に来て』

忍び足で近づいてきた現実が、私の肩を叩いて存在を主張した気がした。急に意識がはつきりして、突然目の前に現れた いや本当はいつもそこにあっただが、私がその存在を見て見ぬふりしていただけなのかもしれない 絶望という名の死神が、まるで手に触れることができるほど鮮明に目に映る。そしてその手に持った鎌を、私の喉元につき付けた。

瞬間、寒させいではない身体の震えが起こり、思わず両手で自分を抱きしめた。

しっかりしろ。大丈夫。大丈夫だから。

何が大丈夫だというのか。事態は全く好転していないというのに。わかってはいるが、そう言い聞かせなければ目の前に待ち構えている恐怖に押しつぶされそうだった。

恐怖と、行かなければという使命感が、私の中でせめぎ合う。

(覚悟はできていたはずでしょう)

そう自分の奮い立たせ、ついに身体を動かす。足に力を入れて歩を進める。目指すは彼の部屋。

たどり着き、ドアを見据える。今にも逃げを選んでしまいそうな心を、落ち着けようと二度深呼吸。

声が震えないように全神経に活を入れ、心の中で「行くんだ！」と叫ぶと同時に、ドアを軽く三度叩いた。

「お兄ちゃん入っていい？」

「……おっ、入っでいいよ」

29話（後書き）

ちよっとダレるかなと思ったけど、そのまま決戦に挑むのは展開が早すぎる気がしたので。

ヒカリさん最近ネガティブだなあ……。

30話(前書き)

覚悟して読んだ方がいいかも。

ドアノブを回しゆっくりと内側に開く。

私の中の想いが膨れるにつれ、入るのを意識して避けるようになり、長らく訪れていなかった彼の部屋。昔はもっとものがあった、服や教科書が散乱していたはずだが、今ではきれいに整頓されていてすっきりとしている。

そんな片付いた部屋にふさわしくない彼は、部屋の奥の窓の前に置かれたベッドの上にラフな服装で、胡坐をかいて座っている。

「よう。おかえり」

「た………たたいま」

昨夜とは違い、普段の穏やかな雰囲気を纏っている彼。いつも通りの挨拶を交わし、私に微笑みかける。それは今から起こることにとてもじゃないがそぐわない表情で、私の不安を煽った。

「まあ、座れよ」

いつまでも立ったまま動こうとしない私を見かねたのが、自分の横に来るようにマットレスをポンポンと叩く。

お兄ちゃんはおわかっていているのだろうか。私は血のつながった兄であるあなたを愛してしまっている、キタナイモノなんだよ。そんな危険生物に隣に座らせようなんて、危機感がなさすぎる。

またこの状況でお兄ちゃん傍に行くのは、私の精神衛生にとってもあまりよろしくない。が、優しい彼に甘えて、嫌な役を押し付けている後ろめたさが私に押し掛かるので、拒否することもできない。

短い葛藤の末、渋々彼の隣に腰を下ろす。新たに加わった重みにベッドが少し沈んだ。

思わず息をのむ。彼との間にある距離は、少し身体を動かせば当たってしまうほどに近い。彼に最期を告げられるために来たはずなのに、これほどまで至近距離にある彼の存在に、不覚にも胸が高鳴った。

しかし私の無恥な想いはそれに留まらない。

昨夜のように狂った感情に任せてあなたに触れたい、という欲望が湧き出てくる。

まったく私という人間は、

馬鹿じゃないの？

この期に及んで、そんなことを考えてしまう自分に、ひどく冷たい嫌悪の感情が浮かんだ。

こんな汚い自分が彼の隣に座ることなんて、と気後れしてしまい、思わず距離をとってしまう。

そんな私の様子に、隣に座るお兄ちゃんが苦笑し、ははっと声を漏らした。

途端に自分のとった行動が、相手の気分を害するかもしれない軽率なものだった、と後悔する。

気分を悪くさせてしまっただろうか。いたたまれず視線を落とすた。

「……それで、だ。昨日のことだけだ」

遠慮がちに発せられた言葉に、身体が反応し肩がビクツと跳ねる。忽ち空気が張りつめたものに変わり、背筋に寒いものが走った。

「……うん」

不安を悟られないための短い返事。そしてお兄ちゃんは静かに話し始める。

「……俺、さ。ヒカリの気持ち、一晩考えてみた。なんでお前があんなことしたのか。どうして俺に対してそんな気持ちになるのか。そして俺はお前の想いにどうこたえるべきなのか。……でだ。結論を言つと……」

お兄ちゃんは一端言葉を切ると、男にしては大きな目を伏せ、鼻から息を吐きだす。いつになく真剣な顔。恐らく最後の決意をしているのだろう。彼の色が変わるほど固く閉じられた唇が、その思いの重さを物語っている。

近づいてくる終わりの時。ゆっくりと、確実に近づいてくる“それ”に、心がざわめき、あまりの恐怖に足が理性の束縛を解いて、この場から逃げ出そうと画策する。今日何度目かになる、現実から逃避しようとする心を必死で抑えつける。

本当に私はなんて卑怯で矮小な生き物なんだろうか。自分で終わりにするのがつらいから、彼から終わりを告げるように仕向けたのに、今はそれから逃げ出そうとしている、悲劇のヒロイン気取りもいい加減にしる。

「……ヒカリ？」

心の中で自身を糾弾している内に、意識をとばしてしまっていた。自分を呼ぶ声の方向を向けば、こちらを見つめるお兄ちゃんの不安と苦悩が入り乱れた表情。

ああ、なんで私は彼にこんな顔をさせているんだろう。

「ごめん。お兄ちゃん続けて」

「あ……ああ」

彼は続きを促されたことが言うきっかけになったようで、答えは思いのほかあっさりと言げられた。

「ごめん。やっぱり俺、ヒカリの気持ちは受けとれない」

お兄ちゃんの口から発せられた最期。

予測していた結末のはずなのに、心が鈍い悲鳴をあげる。

「……うん」

淡々と呟く私に彼は続ける。

「俺、ずっとヒカリのことを妹として見てきたからさ、やっぱり妹としてしか見れないんだ」

「……………そっ……………か」

言葉がこれほど痛いものだとは初めて知った。何度も脳内でシミュレートされていた展開で準備もしていたはず。なのに、現実になると胸がとんでもなく痛くて苦しい。まるで彼の言葉が、目には見えないナイフとなって私の心臓に突き刺さるようだ。

そして予想をはるかに上回る痛みは、私に現実を真に理解させた。

あなたは私の光だけど……私はあなたのヒカリにはなれないんだね。

このなんの捻りもないラストはあまりにリアルで、9年分の想いの終着点はこんなあっさりとしたものなのか、とやるせなさがジワジワと心に沁みこんでいく。

しかし、感傷に浸れるのは彼が再び口を開くまでの短い間だけだった。

「なあヒカリ。俺たちさ、ずっと仲のいい兄妹だったろ。……だから……俺はこれからもそうありたい。……なあダメか？」

ああ、考えていた中の最悪手をあなたは選んでしまった。あなたはわかっていない。それは私にとって最も残酷な選択だということを。

今さら妹に戻れるわけがない。今までのように妹の“フリ”を続けるのも無理。

(でも……あなたがそれを望むなら)

これ以上勝手な想いであなたを傷つけたくないから。私はまた舞台に立とう。

正直、これから繰り返される地獄の日々に耐えられる気はしない。だけど始めたのは私なのに、その尻拭いをせずに勝手に自己完結をするなんて許されない。この異常な想い断ち切り、これ以上彼に苦しみを味あわせないようにするんだ。

だから言わないと。

苦渋でゆがんでいた顔を見られたくなくて俯けていた顔に、なんとか笑みを貼り付ける。

不自然な動作にならないように、意識して顔を起こし、こちらを見つめる彼の双眸を見つめ返し、できるだけ明るい声で、はっきりと告げる。

「……………うん。わかった。これからも“キョウダイ”としてよろしくね。お兄ちゃん」

「……………おつ」

お兄ちゃんの返事とともに、私はゆっくりと立ち上がり、「じゃあ、これから勉強するから」、と一言残して部屋を後にした。

(……………ちゃんと笑えてたかなあ)

退出するときに背中に感じた彼の視線を思い出し、ふとそんなことが気になった。押し隠した私の心がバレてないといいな。

自室に戻ると早々にベッドに身体を投げ出す。ボスツと音を立てて沈んだ身体にはもう力が入らない。それでも頭はひどくはつきり

していた。

もう何も見たくない、何も聞きたくない。色を失った世界で私は独りぼっちになってしまった。寒くて暗い奈落の底で、禁忌を犯した罪人を縛る鎖で巻かれ太私は、這いあがれないように横たわっている。

愛しいあなたがない世界。それはこんなにも暗く冷たい。そしてなんの希望もない無価値なもの。

よかった。心底そう思う。このくらい苦しい方がいい。これくらい苦しくないと、またあの想いが再生してしまうから。……でも。

(今日だけは……今日だけは弱音を吐かせてほしい。明日から頑張るから。せめて今日だけは)

身体を反転させ、俯せの状態にして枕に顔を埋める。

「っ……もつやだぁ………」

無意識にこぼれた言葉を皮切りに、堰を切ったかのように溢れ出す涙。枕に染みを作っていくがどうでもいい。

体中の水分を涙にして、この身がカラカラになって朽ち果てるまで出尽くしてしまえ。

堪えきれず漏れる嗚咽が、隣の部屋に居る彼に聞こえないように、

枕に強く顔を押し付ける。

愛しい彼の顔を思い浮かべながら。

そして、私たちは“普通の兄妹”になった。

エピソード

長く感じられた梅雨も、とうとう明けた。

つい先日まで毎朝のように雨だったが、今日は気持ちが良いほどの快晴なので、あの湿り気を帯びた空気とようやくお別れすることができる。

暑いのは不満だけど。

9年間の想いを洗いざらいぶつけたあの日以来、私たちは元の日常を過ごしている。

まるであの日は夢だったかのように。
だけど、あの日は夢なんかじゃなくて、ただ私たちがあの日の出来事をお互いに忘れたふりをしているだけ。臭いものには蓋をするみたいに。

お兄ちゃんはそのでいい。彼にとっては忘れた方がいい忌まわしい記憶だろうから。

でも、私は……。

……とりあえず、私の気持ちは終着点にたどり着いた。

『仲の良い兄妹』

言葉にすれば一見微笑ましい光景が目には浮かぶだろう。が、私たちに關して言えば、それはひどく滑稽ものだ。

だって一方は本気でそうだと思っているけど、もう一方は“ふり”だから。

とにかく、確實の言えるのはもう私たちの關係はここから動かないということ。絶対に。何があっても。

これでいい。

正常な日々。非常識な事なんて存在しない。穩やかに、ゆるやかに流れていく。

「……でも……まだ終わりじゃない……か……」

そう私にはまだ贖罪が残っている。あなたを苦しめた罪に対しての、ね。

あなたが望むのなら、私は一生“良い妹”でいるよ。

つらいし苦しいけど、これは罰だから。禁忌を犯した咎人へ、神様が与えた。

この業は私が一生背負っていく。あなたがもう決して傷つかなくていいように、ちゃんとやり遂げてみせるから。

いつかあなたが、私ではない誰かと結ばれる別れの日まで、私はあなたの傍で笑い続ける。

あなたが幸せであり続けることを祈りながら。

それが今の私の願い

エピローグ（後書き）

これにて一章は終わりです。

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます。

今後の予定は、番外編1話投稿してから、二章の方に移ろうかと考えております。

ちなみに番外編は過去編そ予定してましてね。ほのぼの路線でいきます。

暗い話ばかりで心が痛くなったので（笑）

とある日のこと(前書き)

ヒカリり小学4年生。太一は中学1年生のときの話。

ピピピッと電子音が部屋に鳴り響いた。

「38度2分か。熱、下がらないわね」

温度計を見てお母さんはため息をつく、それをケースにしまう。「ごめんね。今日はどうしても休むことができないの。だから今日は一人で我慢してね」

昨日から学校を風邪で休んでいる私を見て、ひどく心配そうな表情浮かべるお母さんは、申し訳なさそうに言った。

こんな顔をさせてしまう自分の病弱な身体が恨めしい。デジタルワールドでの日々を終えてからは、ちょっとは強くなれたと思ったのに。

お母さんの心配を少しでも和らげようと、無理やり笑顔をつくる。

「お母さん。私は大丈夫だから。心配しないで」

「ヒカリ……。わかったわ。できるだけ早く帰ってくるから。それまで大人しくしているのよ」

お母さんは立ち上がり、わきに置いていた黒いバッグを手に持った。仕事に行くときにいつも持つていく、お母さんのお気に入りのものだ。

「気を付けてね」

「ヒカリこそ。じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

ドアの閉まる音。途端に静まりかえる部屋に、誰に対してでもないつぶやきがこぼれた。

「……行っちゃった」

広くなった部屋を見たくないから、ドアと反対方向にある窓しか

視界に入らないように身体を傾ける。

陽の光が明るくて、カーテンを閉めても遮ることができず、私の目を焼く。

まぶしい。寝返りをうちたいけど、がらんとした空間を見る勇氣がどうしてもでないの、我慢する。

独りの部屋はさみしさで満ちていて、動くものは私と壁にかけられた時計だけ。カチカチと耳の奥で反響して次第に大きくなっていく音が、私の孤独を煽る。

私は幼いころから体が弱かったから、独りでいるのは慣れてる。でも、慣れてるからといって大丈夫なわけじゃなくて、独りでいると気持ちも弱くなるし、後ろ向きなことを考えてしまい、それを誤魔化すことだけがうまくなった。

私は独りがこわいんだ。いつの間にか私の傍からみんな消えてしまつて、孤独の海をただひたすら漂うつてしまふ。そんな想像がいつの日か現実になるのではないかと、と。

バカバカしいと、一笑にふすことは簡単だ。だけど、二年前も風邪でキャンプに行けなくて独りぼっちだった。昼に別の世界から帰ってきたお兄ちゃんとコロモン。二人もまたすぐにあちらに戻り、私は独り置いていかれた。過去の体験から、私は孤独という恐怖を拭うことができなくなつてしまつたんだ。

こんなことを考えるのは風邪のせいだ。そう思い寝ようとするが、いっこうに眠気がおとずれない。仕方がないのでボーっとしていると、小さくドアの開く音が鼓膜をゆらした。

（誰だろう？ もう家には誰もいないはずなのに。……お母さんが心配して戻ってきたのかな？）

入ってきた人間を確認しようと身体を起こそうとするが、うまく身体が動かないので、ゆっくりとした動作になる。その間に忍び寄る気配。ベッドの前で止まると小さな声で言う。

「……ヒカリ。……寝てるのか？」

そんなはずない。だって今日学校に行ってるはず。

身体を起こしたとき、目に映ったのは。

「お兄ちゃんなんているの!? 学校は!？」

驚いた私がかすれた声で尋ねると、寝ていると思っていたのだから、お兄ちゃんは吃驚した顔になり、ぱつが悪そうに頭をかいた。

「今日は……その……休みなんだ」

見え透いた嘘。熱で頭が働かない私でもわかるような嘘をつく彼に、まさか、と不安を抱く。

「ウソ。……お兄ちゃん、学校休もうとしてるでしょ」

凶星なのか、ウツと声をあげる。

やっぱりそうか。無意識に溜息がこぼれた。

「……お前のことが心配なんだよ」

深刻な表情。心から私を心配してくれているのが見て取れる。

そのこと自体はともうれしい。だけど、お兄ちゃんに迷惑をかけたくないから、「やっぱり学校に行つて」と、言おうとする。が。

「俺が勝手に休んでるだけだから、お前は心配しなくていいよ」

先手を打たれてしまった。私がお兄ちゃんのすることがわかったように、お兄ちゃんも私の言おうとしたことがわかったのだろうか。

一瞬言葉に詰まる。だけど、それで引くわけにはいかない。

「でも……」

なおも食い下がろうとする私に、お兄ちゃんは「いいから心配すんな」と制し、私を宥めるように微笑んだ。

その顔に急に身体が熱くなる。風邪が悪化したわけでない原因不明の体温上昇に、困惑した。

よくわからないけどお兄ちゃんの顔を見るの恥ずかしくなり、布団を顔が半分隠れるまで引き上げる。

ドクドクと高鳴る心臓。胸が痛い。

思わず目をつぶった私に、お兄ちゃんは寝ようとしている、と思つたのか「悪い。寝ようとしたのか。じゃあおやすみ」と声をかけると、止める間もなくドアの閉まる音と共に部屋を後にした。

結局、お兄ちゃんは学校を休んだ。一度学校から電話があったみたいだけど、こういうときはいつにも増して回転が速くなる頭で、なんとか先生を丸め込んだらしい。

こんなことに無駄に頭を使わなくてもいいのに。まあ、そんなところがおにいちゃんらしいんだけど。

なんだかんだ言ってもお兄ちゃんが居てくれるのは嬉しい。

お兄ちゃんが居てくれるだけで、心細さや寂しさといったマイナスな感情がどこかへ消えてなくなって、安心して胸がいっぱいになる。ホッとすると、先ほどまで気配のかけらもなかった睡魔が急に襲ってきた。

自分を呼ぶ声がする。

いつの間にか、寝てしまっていたらしい。

「ヒカリ。昼飯作ったけど食うか？」

ドアの隙間から、顔だけのぞかせるお兄ちゃん。ヒョコッという効果音が付きそうな体勢が、なんだかおかしい。

「うん。ありがとうお兄ちゃん」

私の返事を聞くと、ドアを完全に開いてからおかゆの入った碗をカラフルなお盆に載せてベッドの傍に腰を落とす。

それから私はお兄ちゃんの次の行動に困惑することになった。

(な……なんでこんなことになってるの?)

目の前にあるお粥の載ったスプーン。それを持つ手をたどると、行き着くのは私ではなくて、お兄ちゃんの手。

いわゆる、アーンの体勢だ。

「じ……自分で食べれるよ」

首を横に振って自分で食べるよ、とアピールする。が。

「遠慮すんなって。ほら」

私の行動を無視し、スプーンを私の口の前に突き出す。

こつなつたらお兄ちゃんは聞き入れてくれないので、抵抗するの
はあきらめた。

(本当に過保護なんだから)

心の中で悪態をつく。

誰に見られているわけでもないのに、すごく恥ずかしい。

私は頼んだわけじゃない。そう頭の中で言い訳して、目の前のス
プーンを口に含んだ。

「……おいしい」

あまりの恥ずかしさに、消え入るような声。それでもお兄ちゃん
は満足したようで、「そうか。じゃんじゃん食べ」と、またスプー
ンでお粥をすくう。

恥ずかしさを考えないようにして、ひたすらお粥を口に入れては
飲み込むを繰り返す。

だけど元々食の細い私は、お碗のお粥を半分だけしか食べられな
かった。せつかくお兄ちゃんがつくってくれたのに。

私が申し訳ない気持ちで黙っていると、お兄ちゃんは何を思った
のか、「ヒカリ……俺が休んだこと怒ってる？」と、不安げな声で
尋ねてきた。

「ううん。だって、心配してくれてるだもん。むしろ嬉しいよ。…

…でも」

「でも？」

「お兄ちゃんに迷惑かけて申し訳ないなあって」

私の本音にお兄ちゃんは目を丸くした後、急にハハッと笑い、「
本当にお前は」とかすかに聞こえるくらいの大きさでつぶやいた。

「そんなこと気にしなくていい。俺はお前の兄貴なんだぜ。妹の心
配するのは兄の特権だからな」

「お兄ちゃん……」

「だからさ、お前は俺に気を使うことないんだ」

そう言って、お兄ちゃんが頭を撫でてくる。

まるで壊れ物でも扱うかのように、優しく、柔らかく手を滑らせ

る。

まただ。またしてもわけもわからず身体が熱を帯びる。それはお兄ちゃんが触れているところから発生しているような気がする。

なんだかムズムズするけど、嫌ではない。むしろ……もっとお兄ちゃんに触ってほしい。

無意識にそんなことを考えてしまった私は、慌ててしまって、余計に体温が上がるといふ連鎖を起こしてしまう。

「ヒカリなんか熱いぞ。熱上がったか？」

頭を滑っていた手が止まり、顔を覗き込まれた。

「う、ううん。大丈夫」

「そうか？ ならいいけど」

そう言っつて、また撫で始める。

良かった。と安堵すると一気に疲れが襲ってきた。

子守唄ではないけど、その緩慢な動きが満腹感や疲れと共に眠気を誘い、瞼がだんだんと落ちてくる。

(眠くなってきちゃった)

私がつとうとしてるのがわかったらしいお兄ちゃんは、私の頭をゆっくり枕に載せ、布団を首元まで引き上げてくれる。

「傍に居てやるから。寝てな」

頭を撫でるお兄ちゃんの手感触を感じながら、私の意識は夢の世界にとんでいった。

その夜。お母さんのところにお兄ちゃんの仕事の先生から電話があったらしく、お兄ちゃんは帰ってきたお母さんに雷を落とされた。「太一！ いくらヒカリのことが心配だからって、学校を休んでいい理由にはならないのよ！」

お兄ちゃんはリビングで正座させられ、お母さんの説教を受けている。

お母さんの勢いに押され、「はい」「と」「ごめんなさい」「しか言え

ないお兄ちゃん。確かに学校を休んだのは悪いことだけど、もとは
と言えば私が風邪をひいて心配をかけたせいで、お兄ちゃんが悪い
わけではない。

罪悪感にさいなまれた私は、お兄ちゃんをなんとか助けようと、
お母さんに今日お兄ちゃんがしてくれたことを話し、なんとか怒り
を鎮めようと試みる。

「お母さん。お兄ちゃんは悪くないよ。私が風邪なんかひいちゃっ
たから心配してくれただけ」

「ヒカリ……」

私の言葉にお母さんのまどついていた空気が一変した。

これはいけるかも。と、手ごたえを感じ、さらに続ける。

「それにね。お兄ちゃんお粥作ってくれたり、私が寝るまで傍に居
てくれたりもしたんだよ。そのおかげで今はもう熱も下がって、体
調も良くなったの。……だから、もう怒らないであげて」

私が言い終えると、お母さんは黙って私の額に手を当てる。もう
すっかり熱は下がっているの、お母さんの手のひらの方が熱く感
じた。

「確かに熱は下がったみたいね」

ふう、と大きく息をつき、お母さんはお兄ちゃんに視線を戻した。

「……ヒカリに免じて許してあげるわ。……でも、もうこんなこと
しちゃだめよ」

「わかったよ、母さん」

お兄ちゃんのしおらしい返事。その態度はお母さんの目には十分
反省したように見えたのだろう。「わかったらよろしい」と、怒り
をおさめた。

「ただ私は気づいていた。お兄ちゃんが小さくガツポーズをし
ていたことに。」

……お兄ちゃん。

私が呆れていると、突然電話が鳴り、お母さんが慌てて向かう。

お母さんが傍を離れたのをいいことに、お兄ちゃんは「ヒカリ。サンキューな」と、いたずらそうな笑みを浮かべた。

「どういたしまして」と、言いたいところだけど、お兄ちゃんに迷惑をかけたくないのどくぎを刺しておく。

「心配してくれるのはうれしいけど、もうしたらだめだよ」

その言葉にお兄ちゃんは頬をかいて、苦笑する。

「それは……どうかなあ……」

絶対にまたする。そう確信した。

本当に困った人だ。心配性のお兄ちゃんに思わず笑みがこぼれる。そんなところがお兄ちゃんのいいところなんだよね。

彼の優しさにポカポカする胸。そこに溜まっている気持ちを口に
する。

「お兄ちゃん。私、お兄ちゃんのこと大好きだよ」

途端にお兄ちゃんは目を見開いた。

「おいおい、どうしたんだ急に」

動揺しているようだ。狼狽えている姿が可愛い。

「えへへ。お兄ちゃん」

「……変なやつ」

そんなことを言いながらも私の頭を優しくなでしてくれる。照れ隠しも混ざっているようで、前よりちょっと雑な手つきが、余計に私の心を温かくした。

お兄ちゃん。ありがとう。今日学校を休んでまで看病してくれて、私本当に嬉しかったよ。

だけでもらってばかりは嫌だから、今度お兄ちゃんが風邪をひいた時は、お兄ちゃんがしてくれたいように私が看病してあげる。約束するよ。

でも、たぶんお母さんにおこられるから。

そのときは一緒に怒られてね。

とある日のこと(後書き)

誤字脱字があればご報告ください。

プロローグ（前書き）

ごめんなさい。以前消しましたものとはかなり違います。

ブローグ

月曜日は体がだるい。週の始まりということもあるけど、この日は講義が一コマ目から五コマまで入っていて休まることがない最悪の日だ。

あまりにつまらなさ過ぎて、一分が一時間に感じられた講義を終え、俺の脳は完全にスリープモード。

ついでに連日のサークルで身体も疲れているので、体調は最悪。

(ああ……早く帰って休みたい)

心の奥底から湧き出す願望が進まない足を急かす。が、目と鼻の先にある信号が変わり足を止める。

(ちっ。ついてないな)

この信号を渡れば家はもう目の前だというのに。

仕方がないので道路を行きかう車の大群を見つめる。

いつもと変わることない都会の喧騒。普段なら気にもならないことが今の俺には疲労を募らせる。

見るのが嫌になったので、視線をポケットから取り出した携帯に移す。

六時二十五分。高校生の妹はもう帰っている時間だろう。いつも寄り道したりしないのだ。

彼氏の影もない。俺に言ってないだけかもしれないけど……。

「……………うおっ……………さむっ」

俺の心が冷えていくのに反応したのだから、木枯らしが寒がる俺をあざ笑うかのように吹いた。

青から赤に変わる信号。動きを止める人、自転車、車。

でもまた再び動き出す。

俺とは違って。

あの暑い夏の日から、氷のように固まって動かなくなってしまう俺の気持ち。それが動き出すことはもうないだろう。

進行方向の信号が変わると同時に、肩に重く押し掛かる負の感情を振り払うように早足で帰路を急いだ。

プロローグ（後書き）

亀更新の本領発揮です。

1話

やっと家に着き、玄関に入る。が、明かりがついていない。変だなと思い、靴を玄関の明かりをつける。

ヒカリの靴がない。彼女はまだ帰っていないようだ。

いつもなら既に帰っているはずなのに、と訝しく思ったが、妹ももう高校生だ。

友達と遊んで寄り道して遅くなることもあるだろう、と自分を納得させようとする。それでも、頭の片隅にこびりついた不安は、はがれはしない。

(もしかしたら、事件にあってるのかもしれない)

そんなことを考えてしまい、メールしようとポケットから携帯を取り出す。

(六時半か。七時になってからでいいか)

時間を確認し、まだ早い、という結論に至り、携帯を静かに閉じる。こんな時間に心配メールなんてすれば、また過保護と口を尖らされるに違いない。

まあそれはそれで構いはしないけど。

携帯を再びポケットに戻し、あえて揃えずにスニーカーを脱いだ。その赤いラインの入ったスニーカーは意識して乱暴に脱いだので、てんでバラバラに散らばり、片方はひっくり返ってしまっている。

(あいつ、俺がわざとやってるって気づいてないんだろっなあ)

“あの日”まではいつも注意されていた靴の脱ぎ方。俺が先に帰っているといつもだ。

ヒカリは俺のことを、だらしない性格だと思っているだろう。でも、それは幼少の頃までで、俺は自分で言うのもなんだけど几帳面な性格だ。部屋もちゃんと片づけてるし。

そんな俺がなんで靴は整えないかというと、ヒカリが帰ったとき一番にそれが目に入るからだ。そうすれば、帰ってきて俺のことを最初に意識してくれる。一番に声をかけてくれる。

そんな単純で馬鹿みたいな理由。

でも俺にとってはとても大切に切実な理由。

いつからか生まれた、俺の中のヒカリに対する変な感情。それが、俺にそうさせてるんだ。

2話(前書き)

遅くなつてごめんなさい。

2話

玄関の明かりに仄かに照らされたリビング。

今まで人がいなかった証拠にリビングは寒く、当然そこに求めていた姿はなかった。

がっかり、って感情が、現実には形をもって目の前に現れそうなど胸に広がる。これじゃあまるで安っぽい恋愛ドラマの主人公みたいな感じだ。

途端に恥ずかしくなって、そんな考えを打ち消すために勢いよく左右に頭を振った。

部屋の電気はつける気にはならず、微かな光を頼りに玄関に背を向けるように位置するソファに足を進める。

一歩進むごとに光から遠ざかっていき、部屋の大部分を占める闇に自らのまれた。

今はこの暗闇が心地よい。このままこの闇にのまれて眠ってしまったら……。

なんて思ったが、さすがに寒いので電気を点け、急いでエアコンのリモコンを手に取り、スイッチを入れようとボタンを押した。

ピツという音とともに、リモコンから出る赤外線？ がエアコンに命令する。部屋を暖めると。

徐々にエアコンの口から暖かい風が出て、手がかじかんでじーんと指先から手のひらまで温もりが浸透し、急に温かさを感じたからか身体がブルッと震えた。

ああ、温かい。

部屋を熱風が満たしていき、部屋の温度は快適に過ごせるくらいになった。

しばらくそのまま手をかざして温まり、疲れから横になりたい衝動に駆られソファに寝転がる。

「あー。ほんと疲れた」

声になって発散された疲労の塊は、独りきりの部屋に空しく響く。返してくれる声がない。それがこんなにも空しいことだなんて。

いつもなら、「お兄ちゃん、大学大変なんだね。お疲れ様」なんてねぎらいの声がとんでくるのに。

(……ヒカリのやつ。ホントに大丈夫かよ)

広いとは言えないが、独りでは十分な大きな空間に、不安を凝縮した滴が俺だけにしか聞こえない、高く鋭い音をたてて落ちた。

そんな不安を誤魔化すように、目を閉じ目からの情報をシャットアウトした。

3話

いつからだろう。この感情が生まれたのは。
いつだっただろう。この想い忌むべきものだと悟ったのは。
いつになるだろう。俺がこの慕情捨てることができるのは。

うまく表現できない感情はたった一つの水滴から始まって、コップの水、プールの水、というようにどんどん嵩を増していった。それは俺にとって二度目の体験だった。

一人目は一緒に旅をした帽子を被った女の子。今は俺の親友の恋人だ。かなり長い間、俺たちは近い関係にあつたが未練なんてなくむしろ二人のことは好ましく思っている。

そして今回は、ヒカリ 俺の妹。

そう。俺は実の妹に想いを寄せてしまったのだ。

当然ながら俺は苦しんだ。この感情は勘違いだと言いつつ聞かせたし、気持ち悪いと何度も自分を罵った。最低だとわかってはいたけど、逃げるために他の女の子と付き合ったりもした。

それと比例するように、俺とヒカリの接する時間は減っていった。近くにいれば、どんどん膨らんでいく想いがいつ弾けてしまうかわからなかったから。心臓をえぐり取られるような痛みから、遠くへ逃げたかったんだ。

遠くへ逃げてしまえば、この痛みから解放される。妹へ向けてい

る気持ちを取り除ける
そう思った。

……だけど、ダメだった。

あいつに背を向けても、俺の痛みは治まらないし、むしろ悪化の一途をたどった。

それでも馬鹿な俺は気づかないふりをして過ごした。

だって、自分でもわからない胸に渦巻く気持ちの悪い感情、そんな得体のしれないものと真正面から向き合う“勇気”は俺にはなかった。のみこまれてしまうのが怖くて仕方がなかった。

今思えば、自分は正常だ、っていう確証が欲しかったのかもしれない。

それが逆に俺のバランスを崩し、そう思わなければいけない一種の強迫観念に襲われようになった。

そのときの俺は常時イライラしっぱなしで、気に入らないことがあると人にあたってしまうこともしばしば。そんな状態だから次第に周囲との関係も悪化していった。

だんだん俺は周囲から孤立していき、俺に声をかける奴はいなくなっただ。

それでいいと思った。

こんな下種な俺に近づいてもいいことないし、その方が俺も気も楽だ、と。

ずるずると負の蟻地獄に沈んでいく俺。誰もいない暗い世界にたった独り。助けは来ない。

どれくらい沈んでいたのかわからない。一生ここにいると思って

いた。

そんな暗くて寒い場所に、差し伸べられた小さくてか細い腕。俺の腕をつかんで必死に引つ張り上げようする。この細腕のどこにそんな力があるのか、驚くほどの強い力だった。

温かい。俺は反射的にその手を掴んだ。この優しい手の持ち主が誰なのか知りたかった。

そして俺は気づく。唯一手を差し伸べ、引き上げてくれたのはヒカリだということに。

俺は驚きとともに、納得してしまった。

そういえば……。

彼女は全てのこと疲れきっていた俺をずっと心配してくれていた。

何度無視しても、怒鳴っても、俺の身を案じ、「疲れたときは甘いものがいいよ」と言い、俺のためにお菓子を手作ってくれた。

そんなヒカリの優しさの数々を思い出し、零れ落ちてくる涙ですら温かいと知った俺は、この兄想いの優しい手を二度と俺から離すことはないようにする。いつかお前が俺の元から旅発つそのときまで。

そう誓いを立てて、俺は光の当たる世界へと戻ってきたんだ。

ヒカリ　お前の隣に。

4話

「う……ん」

金属の鈍い音が耳を打つ。毎日聞きなれた音。これは……。どれくらい眠っていたのだろうか。目が覚めたのはいいが、身体は気怠く、頭はぼんやりとしている。

（今……何時だ？）

ポケットに入れっぱなしだった携帯を取り出す。暗い部屋に、携帯の画面の光はあまりに眩しく、反射的にウツと目を細めた。

なんとか目をこらして、画面に鮮明に映し出された数字を見る。

20時26分。

（うわっ！ やばい！ もうこんな時間か！）

思いがけず過ぎていた時間に慌てて一気に脳は覚醒し、すぐさま現状確認入る。

部屋は暗いまま。ってことはまだヒカリは帰ってないってことだ。辺りを観察してもリビングに人の気配はないので確かだ。

ん……ヒカリが帰っていない？ こんなに遅い時間なのに？

（おいおい。なんでまだ帰ってないんだよ！）

再び携帯画面に目を落とし、メールが来てないか確認する。が、空しくも受信ボックスには新しいメールはなかった。

そのことに苛立ちを覚え、携帯を強く握ってしまう。ミシミシと音を立てる金属の塊があることに気が付いた。

そっぴいえばさっき聞こえた音はドアの。

そう思った途端、部屋の暗闇がパツと晴れた。電気が点いたのだ。「お兄ちゃん？　なんで部屋の電気点けてなかったの？」

後ろから聞こえた、耳に心地よい高く透き通った声。今の今まで俺の心を乱していた存在が、振り返ればいた。

「……ヒカリ」

不思議そうな顔で俺を見つめている妹を見た瞬間、驚きが、一拍おいて安堵が身体を駆け抜けた。しかし、それも束の間、いつもより遅い帰宅にふつつつと怒りが沸き起こった。

「こんな時間まで何していたんだ！？　遅くなるんだったら連絡ぐらい入れる！　心配したんだぞ！！」

自分の口から出た、怒気をはらんだ低い声。思ったよりも強く発せられたそれは、目の前の守りたい存在を怯えさせた。

しまった。

そう思った。が、後悔先に立たずとはよく言ったものだ。俺の中を、一瞬にして駆け巡る後ろめたさ。無意識に握り込んだ拳は、じつとりと汗が湿っていた。

「う……ごめんなさい」

思いもかけなかったであろう俺の怒りに、恐縮し、身を引きながらも懸命に謝罪の言葉を述べるヒカリ。

違う。俺はヒカリにこんな顔をさせたいんじゃない。俺は

先ほどまでみていた過去の夢を思い出し、自分の決意を再度確認する。

そうだ。俺はヒカリを、妹を守るんだ。

兄として。

だから。

「怒ってごめんな。たださ。遅くなるならちゃんと連絡してくれ。女の子が夜で歩くのは危ないから、な」

さっきまでの怒りを感じさせないように、できるだけ優しく諭す。鏡が無いからわからないけど、たぶんうまく微笑んでると思う。

そんな俺の努力が実を結んだのか、ヒカリの顔が恐怖から、安堵の様子に変わった。

「……はい。ごめんなさい。今度から気を付けるね。お兄ちゃん」「そうしてくれると嬉しい。俺の心臓が破裂しないためにもな」「アハハ。うん。お兄ちゃんのためにもちゃんとするね」

くだらない冗談を笑いながら返してくれるヒカリ。俺をひとまずほっとし、この場はそれで終わらせようと思った。が……。

「手を洗ってくるね」そう言いながら、振り返って洗面所に行くうとする彼女の首筋にあったのは、

小さく赤く腫れた、虫刺されのような跡。

夏なら俺もそれで納得したかもしれない。でも今は冬だ。その可能性は限りなく0に近い。

となると。

頭ではもうそれが何かわかってる。わかっているけど、俺の脳と感情は直結してないらしく、それが何なのか理解することを拒否している。

だって……それは……。

透き通るような白い首筋に、赤く咲いた一輪の花。それを付けたのが俺ではない、知らない誰かだという事実、俺の心は打ちのめされてしまった。

5話

あの日、ガラガラと音を立てて崩れ落ちたのは……。

初冬の現在、ますます寒さが増している。もともと冷え症な俺は、朝起きるのが普通の人よりも余計につらく、布団から出るのが苦痛で仕方ない。だからこの時期は嫌なんだ。

頭の中でぐちぐち文句を言いながらも大学に行く用意をする。暖房のきいた屋内から一歩でも外に出ると、身が縮むような寒さが待ち構えて、思わず回れ右したくなった。

「うっ、寒い」

厚手の黒いコートに、マフラー、手袋、そしてヒートテックを身にまとって防寒対策は万全で臨んだはずだったが、外の寒さは俺の予想をはるかに超えていた。朝の天気予報で言っていた今年一番の寒さは、嘘ではなかったようだ。

思わず吐いたため息は、白い蒸気となって、空気中に霧散していた。

「太ーじゃん。おはよう」

「おー。おはよう」

地下鉄の中で、突然声をかけてきたのは俺と同じ大学の女子だった。

学部は違うが、入学当初の友達を作らないと、という思いから、片っ端から絡んでいたときに知り合った子だ。

「珍しいな。一緒の電車なんて」

「うちの学部、今日は朝から学内掃除するとかでね。しかも休んだら文句言われるし。あーあ、本当だったら昼まで寝るコースなのに」

「ははっ。それは災難だな」

「でしょー！ほんと災難！」

そういうと彼女大げさに肩を落とした。

俺はそんな様子に苦笑しつつ、彼女の愚痴を聞いてやっていた。はずだったが。

「なんかボーっとしてるね？　なんかあったの？」

心臓が跳ねた。正直彼女の話などほとんど聞いておらず、適当に相槌をうつっていただけだったから。

「……いや、特に何も」

嘘じゃない。ただ、俺になにか“あった”と言っわけではないだけ。

「そう？　ならいいんだけど」

俺の返答に彼女は納得してはいないようだったが、あまり首を突っ込むべきではないと判断したのか、それ以上は聞いてこなかった。

ここ数日の間、意識が希薄なのは確かだ。大学に行っても講義の内容なんてまるつきり覚えてはいないし、誰かと話していてもなんの話をしていったか記憶にない。それどころ、夏までは大学に行く理由であったサークルでさえ、もはやどうでもよくなっている。

原因は明白だ。妹の帰りが遅くなった日に、見てしまったものせいだ。妹の白い首に浮かんだ赤い斑点。それが意味するところを

わからないほど、俺は子供でも、ましてや純粹でもない。

ヒカリは誰かに抱かれたのだ。

学校で習うような、単純な性の仕組みではなく、現実の複雑な男女の交わり。大多数が大人に至る道で経験すること。

そう。ただ妹は、だれでも経験することをしただけで、それは兄である俺がとやかく言えることではない。

だからこの身体を駆け抜ける、いびつな形をした刃物でグチャグチャに切り裂かれたかのような痛みは、家族のそういう部分を知りたくなかったという、普通の反応のはずだ。

普通の家族の、普通の兄が、普通の妹に対する反応。

でも、本当は違う。

俺は、怖いんだ。俺はおかしくない、と自分に言い聞かせなければ、頭の中で暴れる、腐りきり、歪な形にねじれた狂った想いが理性を溶かしてしまうようで。

理性が消失した後に残る本能は、この世で最も大切な彼女を壊してしまうだろう。彼女の幸せを願っていたはずの、この想いが。

「太一、着いたよ」

少し下から発せられた高い声で、ハッと意識を取り戻す。どうやらずいぶん長い間、俺は暗い思考の底に沈んでいたようだ。

周りを見渡せば、早足に扉から降りていく人々。見慣れた大学の最寄駅の風景に慌て、急いで下車する。

「ありがとな。お前がいなかったら乗ったままだった」
歩きながら、隣にいる彼女にお礼を言う。

「別にいいけど、あんまりボーっとしていると危ないよ」

「ああ、気を付けるよ」
彼女の忠告を受け止めて、忙しなく流れていく群衆の中、ホーム
に続く階段を上った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1086u/>

君の隣【改訂版】

2011年12月21日00時46分発行